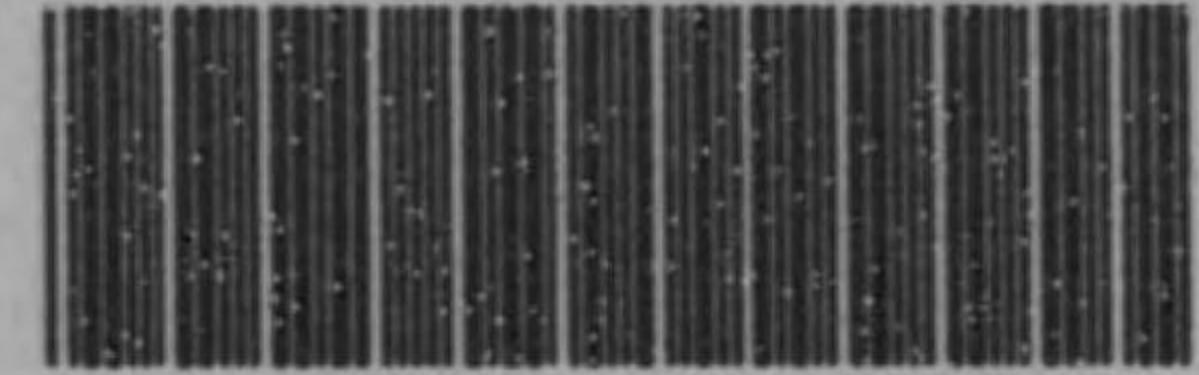


363

Ka776h

批判ムスシツア

河合栄治郎著



0034824000

0034824-000

363-Ka776h

ファシズム批判

河合栄治郎・著

日本評論社

1934

AGC

363

Ka776h

判批ムズシツアコ

著郎治榮合河

科學全集

科學全集

判 批 ム ズ シ ツ ア フ

著 郎 治 榮 合 河

1934

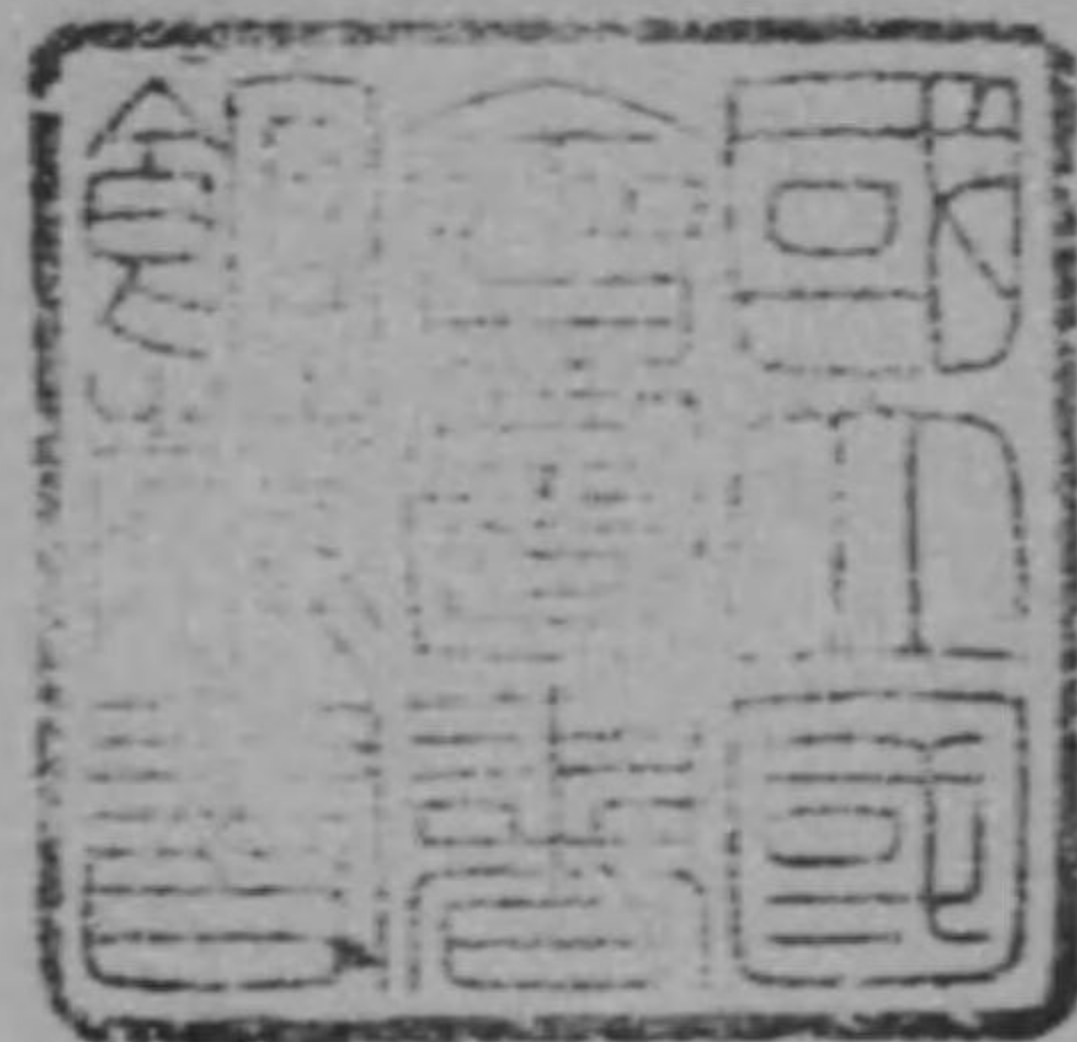
363 Ka 776 h

序

私は今まで大學に就ての外は、時事問題に就て筆を執つたことはなかつた。所が一昨年から昨年にかけて歐羅巴に滞在してゐて、變り往く諸國を眺めながら、祖國を顧みて幾多の感慨に打たれざるをえなかつた。昨年三月末歸朝してから、差當り歐洲の見聞記を纏めてゐる際に、私には珍らしく病魔に犯され、二箇月病床に閉ぢ籠められてゐる間に、日本の將來に就て色々のことを考へさせられた。私自身が過去數年間反動の汚名を負ひながら反對して來たマルキシズムが、思想界から凋落しかけたことは、私にとつて會心のことではないではなかつた。然し日本がファッション的に轉回しつゝあることは、更により悲しむべきことだと思はれた。そこで私の純學問的研究に多少の犠牲を賭しても、日本の問題に就て忌憚なき意見を公にすることは、社會思想家としての私の義務とさへ考へられ、約一箇年を期して次々に時事論文を公にし、それが纏められて本書を爲すほどの分量に及んだ。一年前と今日とを比較すると、日本のファ

序

一



248011

ワシズムにも相當の變化が觀取される。昨年の秋まだ病床を離れなかつた當時の自分の心境を顧みて、多少の感慨なきをえない。

本書に收められた論文は、主として思想を批判した論文であつて、日本の諸問題に對する私の具體的方策を述べたものではない。之は現今の日本にとつて最も重要なことは、積極的な具體的綱領を提供することではなくて、問題の觀點を整理することにあると思つたからである。此の意味に於て本書は私の從來の思想を日本の當面の諸問題に適用したに過ぎないとも云へる。私の思想は今から約十年前留學から歸朝した當時と殆ど變化してゐない。本書は私の思想を唯他の思想との對照の形に於て現はしたに止まつて、私の思想そのものを積極的に叙述はしてゐないが、之に就ては昭和三年「社會經濟體系」に寄稿した「自由主義」、更に私の「社會政策原理」「トーマス・ヒル・グリーン思想體系」を参照せられんことを希望する。

本書は最近一箇年の論文だけを收める積りであつたが、言論自由主義に關する論文を加へたかつたので、大正十五年に書いた「ミルの自由論」に就ての論文を入れ、更に國家社會主義に就ての二論文は、他の論文と聯關もあるので序に加へることとした。後者は一度蠟山政道教授

との共著「學生思想問題」中に收められたのだが、岩波書店主の好意により再び本書に加へることが出來た。本書中の諸論文は雜誌に發表された際、問題の性質上餘りに多くの伏字を用ひることを餘儀なくされた。今度之を整理するに際しても、殆ど現形の儘にしたから、意味の把握しえない箇所も尠くないと思ふ。然し私自身は原稿執筆に當つて一箇の伏字を使用したこともなかつた。唯刊行當事者の便宜を思つてその希望に任せたに過ぎないのである。

私は今までの生涯に於て、常に他人の批評に頓着することなしに、自己の路を歩んで來た。曾てマルキシズムと對立してゐた時、最近又ファシズムと對立してゐる時、その態度に就て終始變る所なかつた。今本書を纏めて一つの段落が着いた時、又更に人生行路の指針を思ふ。「各々の路を歩め、而して人の語るに任せよ」と云ふ古人の言は、今の私が泌々と味ふ有難い言である。

昭和九年十二月十一日

著者

目次

(一) 非常時の實相とその克服……………一

(一) 國際的不安……………一

(二) 社會的不安……………六

(三) 政治的不安……………三

(四) 共產黨の復活……………七

(五) 非常時克服の負擔者……………二〇

(六) 非常時克服の要件……………二六

(七) 國策調査會の提唱……………三〇

(八) 結論……………三六

目次……………一

(二) 五・一五事件の批判……………四〇

- (一) 緒言……………四〇
- (二) 事件の擔當者の批判……………四一
- (三) 直接行動の批判……………四七
- (四) 思想内容の批判 その一……………五一
- (五) 思想内容の批判 その二……………五五
- (六) 思想内容の批判 その三……………六一
- (七) 結論……………六六

(三) 國家社會主義の批判……………六九

- (一) 緒言……………六九

- (二) 國家社會主義の内容……………七〇
- (三) 國家社會主義の内在的批判……………七五
- (四) 國家主義と社會主義……………八二
- (五) 國民主義と社會主義……………八九
- (六) 總括的批判……………九六

(四) 國家社會主義擡頭の由來……………一〇三

- (一) 緒言……………一〇三
- (二) 日本に於ける國家主義……………一〇五
- (三) 最近に於ける國家主義……………一一四
- (四) 日本に於ける社會主義……………一二三

(五) 結 論……………一三〇

(五) 國家主義の批判……………一三四

(一) 現代日本の根本問題……………一三四

(二) 國家主義の意味……………一三八

(三) 國家主義の發生過程……………一四四

(四) 世界觀と社會思想……………一四八

(五) 國家主義の理論的缺陷……………一五三

(六) 國家主義の弊害 その一……………一五八

(七) 國家主義の弊害 その二……………一六二

(八) 國家主義に代はるべきもの……………一六七

(九) 結 論……………一七一

(六) 國際的不安の克服……………一七三

(一) 世界に漲る戦争氣運……………一七三

(二) 戦争原因の第一……………一七六

(三) 戦争原因の第二……………一八〇

(四) 戦争原因の第三……………一八八

(五) 戦争の危険と國內狀勢……………一九二

(六) 今日迄の平和政策……………一九七

(七) 戦争の社會的影響……………二〇一

(八) 戦争是非の批判……………二〇七

(九) 永久的の平和方策……………二二三

(十) 結 論……………二二七

(七) ミルの「自由論」を読む……………二三〇

(一) 緒 論……………二三〇

(二) 「自由論」の由來……………二三四

(三) 「自由論」の内容(一)……………二三三

(四) 「自由論」の内容(二)……………二四一

(五) 「自由論」の批判……………二四八

(六) 「自由論」の意義……………二五五

(八) 瀧川事件と大學自由の問題……………二八九

(九) 國家・大學・大學令……………二八三

(十) 議會主義と獨裁主義との對立……………三〇五

(一) 緒 言……………三〇五

(二) 議會主義の意味……………三〇六

(三) 議會主義と對立するもの……………三二〇

(四) 議會主義と自由主義……………三二三

(五) 議會主義の論據 その一……………三三〇

(六) 議會主義の論據 その二……………三三六

(七) 議會主義への批判……………三三四

(八) 現存議會制度の改革……………三三九

目 次……………七

(九) 結論……………三三四

(十) マルキシズム、ファッシズム、リベラリズムの鼎立……………三三七

(一) 緒言……………三三七

(二) マルキシズムの凋落……………三四九

(三) ファッシズムの擡頭……………三五二

(四) 日本ファッシズム運動の發展……………三六〇

(五) 日本ファッシズムの將來……………三六五

(六) ファッシズムとリベラリズム……………三六九

(七) 日本のリベラリズム……………三七四

(八) 當面の諸問題……………三七九

(九) 現代日本の根本問題……………三八三

(十) 自由主義の再検討……………三八八

(一) 緒言……………三八八

(二) 自由主義の原型……………三九〇

(三) 自由主義の發展……………三九九

(四) 自由主義の再發展……………四〇六

(五) 日本の自由主義の特殊性……………四一二

(六) 自由主義は右に面するか左に面するか……………四二三

(十一) 現代に於ける自由主義……………四三七

(一) 緒論……………四三七

(二) 自由主義より生くべきもの……………四四一

(一) 緒言……………四四一

(二) 理想主義の道德哲學……………四四六

(三) 理想主義の社會哲學……………四五四

(四) 實質上の自由と形式上の自由との關係……………四五八

(五) 思想上の自由と政治上の自由……………四六三

(六) 團結の自由、團體の自由、國民的自由……………四八一

(三) 經濟的自由主義の運命……………四九六

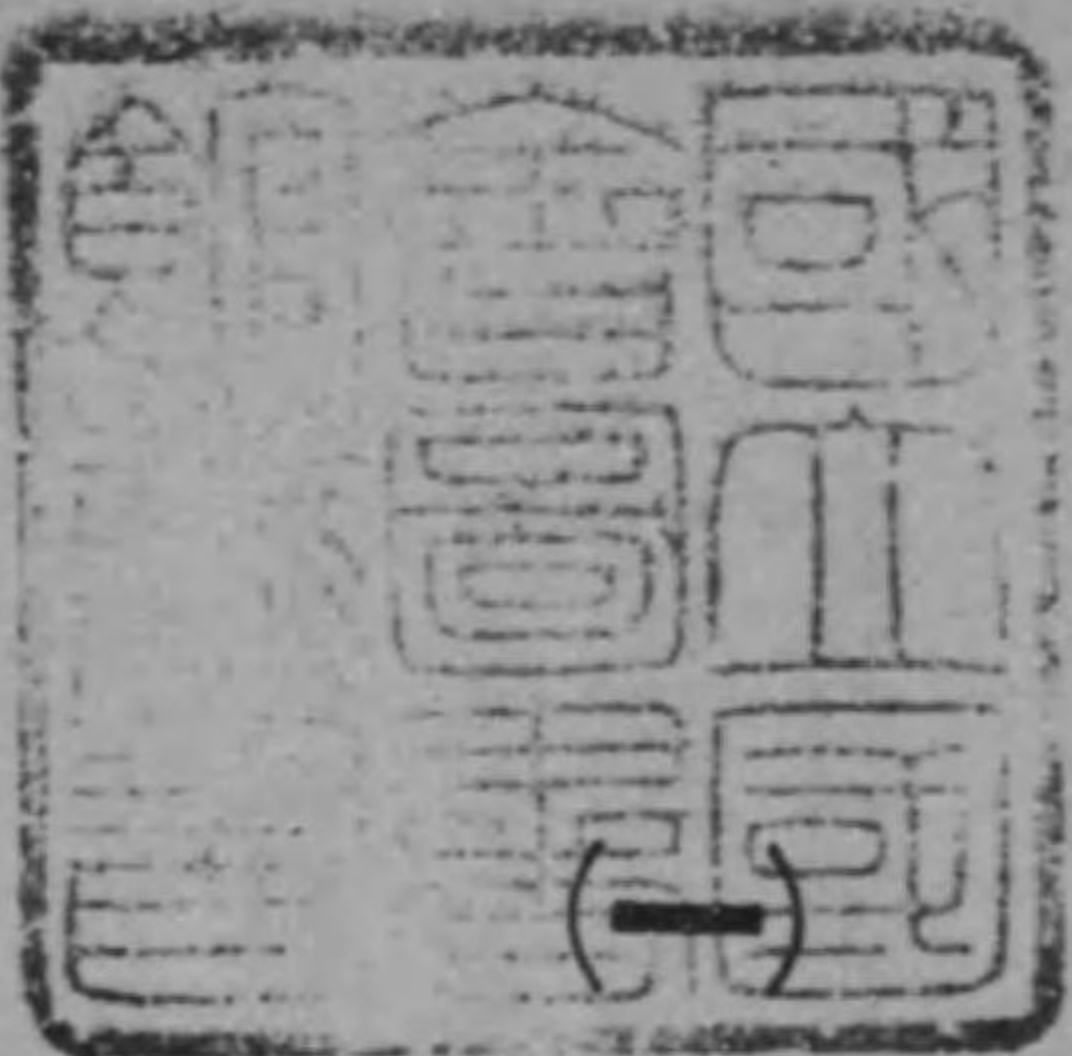
(一) 緒言……………四九六

(二) 經濟的自由主義と社會改良主義……………四九九

(三) 社會改良主義と社會主義……………五〇四

(四) 社會主義と自由主義……………五一三

(五) 社會主義界の對立……………五一九



非常時の實相とその克服

(一) 國際的不安

此の一、二年「非常時」と云ふ言葉は、日本の社會の流行語となつてゐる。何が「非常時」によつて意味されるか、その内容の重點が何處に在るかは、必ずしも始めから一定したのでなくて相當の變遷があつたやうである。然し最近に於て此の言葉は、一九三五年に行はれる軍縮會議と、その會議より豫想せられる結果とを意味するかの如くに見受けられる。之が日本國民にとつて非常時であることに就ては、何人も異議を挿むものはあるまい。今から二年の後に開かるべき軍縮會議をして、非常時たらしめざる外交工作を行ふ餘地のあることは、傳へられる廣田外相の意見の通りである。勿論その外交工作も從來の傳統的外交の手段を離れた、果斷に富んだ方法と徑路とを踏まねばならないであらう。之に就て筆者も亦多少の意見がないではない

一、非常時の實相とその克服

が、それは別論に譲るとして、たとへ適當の外交工作が行はれたとしても、來らんとする軍縮會議の非常時性が全部的に解消するとは考へられない。こゝに於て依然として吾々は、當面の非常時に就て慎重の考慮を費す必要がある。

單に海軍軍縮會議と云ふことだけならば、會議は必ずしも今日の如く非常時の緊張を伴ふまい。それは第一回のワシントン會議第二回のロンドン會議に對して、國民が今日と同様に非常時の語を以て迎へなかつたことを見ても明かである。然るに第三回の軍縮會議を迎へるに異常の緊張を以てするは、何故であらうか。凡そいかなる國も常時一定の對外政策を持つ、そして海軍力は此の對外政策を考慮に置いて決定されるのである。然し一般の場合には此の對外政策は抽象的な従つて未だ具體的の内容を明白にせざることが多い。日本が前二回の軍縮會議に於て比較的冷靜に處理しえた所以は、當時の日本はたとへ一定の對外政策を抱いてゐたとしても、それがまだ眼前の具體的の形態を帯びてゐなかつたからである。然るに來らんとする軍縮會議に於ては、日本は最も具體的な成案を意中に抱いて、海軍力の比率を決定しようとしてゐる。即ち滿洲國の獨立と南洋委任統治領の保持とは、讓歩すべからざる最少限度の國策として、之

を防衛しうるか否かを基準として海軍力の比率を決定せんとするのである。一部の人は此の二個の問題を最後まで讓歩すべからざる限界線とすることに、異論を唱へるかも知れない。然し日本國民の絶對多數は此の成案を支持するだらう。そのことを與へられた前提として考へるならば、次の軍縮會議は單なる海軍力比率決定の會議ではなくて、日本にとりては生々しき現實の政策を貫徹するか拋棄するかと云ふ決定の會議となる譯である。英米二國が會議に於て同様の態度を以て問題を處理するかどうかは確言の限りではないが、少くとも日本にとつて會議は軍縮の會議ではなくて、外交の會議である。之が來らんとする軍縮會議が非常時性を帯びる第一の理由ではないか。

若し會議が少くとも表面は單なる海軍力の比率決定の會議だけとして、日本の政策に觸れずして終はつたとしても、日本の要求する海軍力がえられなかつた場合には、包むに海軍力を以てするが中に藏するに一定の國策を以てする日本は、關係列國が日本の所要海軍力を否決したことを以て、日本の國策に對する明白なる否定敵意を端的に表白したものと解して、軍縮會議より歸るだらう。況んや豫想されることは、第一回のワシントン會議の如くに、關係列國は露

肯に滿洲國の獨立と南洋諸島とを論議の俎上に載せると云ふことである。そこに現出される批判と應酬とは、日本國民を緊張と興奮とに驅るだらう。而もジュネーブの聯盟總會に於けると違つて、海軍力決定を目的とする會議であり、日本の海軍力が動もすれば劣勢に陥らんとする時であるだけに、不安と焦燥とが加はらないとは云へない。かゝる事態を背景として會議決裂した時は、暗澹たる妖雲は關係諸國を掩ひ盡すに違ひない。此の豫感が此の軍縮會議に非常時性を與へる第二の理由だらう。

然し以上は軍縮會議の最悪の場合であるが、その最悪の場合が必ずしも當然に國交の最悪の場合とはなるまい。差し當りは激烈なる軍備擴張の競争が現出し、戦争にまでは相當の時間と過程とが挿まれるだらう。然し相對立する數國家が、猜疑と不安と反感と敵意とに驅られることは、正に國交破裂を來すべき好個の醗酵條件である。微細なる一事件の之に加はるならば、枯草に點火した如くにやがて燎原の勢となる。塙國皇儲に投じたサラエボの一彈を迎へた、一九一四年夏に於ける歐洲の狀勢は恰もそれであつた。若し日本を中心とする極東の戦争が假定されるならば、その戦亂の廣範圍なること、引續き諸國の渦中に捲き込まれる可能性の多いこ

と、その期間の長期に互る危険性のあること、決定的の勝敗の困難なることに於て、我が國は歴史上空前の難關に逢着し、その惨害の著しき吾人をして悚然たらしめるものがある。而も假すに異常の努力を以てせざる限り、大勢は日本を驅りて此の危険なる深淵に刻々として近づけつつあるのである。

だが身を一九三三年に置いて、數年の前途を展望する時に、一九三五年の軍縮會議の決裂、それより生ずる戦争、と云ふ一聯の事件が人間の努力を許さざる宿命的の運命とは考へられない。一九三五年の會議以前に又會議の進行中に於て、最悪の結果の發生を阻止する途がないではない。恐らくそれは明治以來いかなる外交家が爲したるよりもより以上の手腕を必要とするだらう、若し日本の外交官にその人あるならば、此の數年こそ彼が國家に奉仕すべき非常の舞臺でなければならぬ。然し外交官の工作を支持する國民の輿論がないならば、彼も亦手腕を揮ふに由ないだらう。今こそ國民は、目下迫りつゝある道程が日本にとつて危険なる歸結に導くと云ふ認識と、その危険がいかほどのものであるかと云ふ實感とを以て、祖國を驅りつゝある運命に對して決然たる判断を持たねばならない。殊に此の場合に注意を逸してならないこと

は、かゝる道程を辿りつゝある日本の内部の狀勢を認識することである。非常時日本の問題は、實に一九三五年の軍縮會議にのみあるのではない。吾々の身邊は次に述べる數多の難問を控へてゐるのである。

(二) 社會的不安

今日多數の人は非常時の狀勢を以て、單に一九三五年の軍縮會議を考へるかも知れない。だが現下の日本に於て非常の狀勢即ち通常に非ざる狀勢は決して之だけではない。今でこそ國防の問題に壓せられて、多數の注意を逸してはゐるが、日本の直面しつゝある別個の問題は、不氣味な沈黙の裡に地上に低迷しつゝある。それは社會的不安である。こゝに第二の非常時狀勢がある。然し此の非常時狀勢は特定の時期に咄嗟に發生したものである。その由來は遠くその淵源は古いではあるが、それが日本の動向に及ぼす重要さに於て、その解決が一刻も忽にすべからざることによつて、非常緊急の程度は敢て第一の非常時狀勢に劣る所はない。

所謂社會的不安とは何であらうか。富は少數の大資本家に集中されて、社會は之等少數者に

左右せられ、農商工を通じて中産階級は生存競争の劣敗者として、僅かに持てる資本を手離して下層に没落しつゝあり、新中産階級たるべき學窓の青年は就職難に苦しみ、労働者階級はその賃銀の低額なることと、その労働時間の長いことと、衣食住の消費生活の苦しいことと、何よりも解雇失業の不斷の脅威に曝されてゐることによつて、動物的存在を續けることにさへ悩んでゐる。富むものは富むことによつて、他人の嫉視反感と不平反抗の爲に不安と憂鬱に沈んでゐる、僅かに持てるものは明日も測られない境遇の變化を虞れてゐる、何ものをも持たざるものは今日の生存を維ぐにさへ戦いてゐる。之は凡そ資本主義の必然に伴ふ結果であつて、吾が國も亦資本主義國の一つとして、遺憾なく資本主義の害悪を満喫しつゝあるのである。眼をあらずもがなの方向に注ぐものには、之等全社會に漲る不安を逸するかも知れない。然し社會のあらゆる成員の人間としての成長——それにこそ社會存續の目的がある——に關心を持つものは、何よりも看過しえない問題がこゝに在ることを認めるだらう。

だが若し之だけならば、世界のすべての資本主義國と共通だと云ふに止まる。然し日本は資本主義國として以上の社會的不安を持つだけではない、その資本主義が最高度でもなく最低度

でもない中間の段階に位すると云ふ點に於て、ある種の資本主義國の持たざる特殊の問題を此の上に附加されてゐる。即ち第一に英國の如く農業（水産業を含み）に従事するものは、人口中僅かに八・五パーセントに過ぎないならば、農村の問題は殆ど無視しうるだらう。又若し露西亞の如く農業者が全人口の八七パーセントと云ふ壓倒的多数を占めるならば、こゝでは反對に農業を重要視するの外はあるまい。然し日本は人口の恰も五〇パーセントが農業に従事するので、露西亞ほど重要視するに至らず英國ほど無視しえないと云ふ中間の地位に在る。此の點に於て伊太利の五六パーセントより稍少く、獨逸の三一パーセントより遙に多いが、何れも資本主義の發達段階の中間型を代表してゐる。而して吾が國が米食を改めない限り於て、當分今後も此の率の著しい變化は起るまい。此の結果として英國や又帝政時代の露西亞と比較にならない難問題が投ぜられてゐる。それは都市と農村との對立であり、農産物の生産者としての農村と、その消費者としての都市との利害が背馳し、農村の必需品に關稅を課するかどうかに就ても、需要者としての農村と生産者としての都市との利害が對立する。

第二に我が國の資本主義發達の現段階に於ては、中小農工商の中産階級は、依然として廣大

なる社會層として残存してゐる。之等の所謂舊中産階級は資本主義の發達と共に、大資本家階級に壓倒されて、労働者階級の地位に沈没するとは、マルクス以來多くの社會科學者の説いた所ではあるが、資本主義の發達の中間段階に在る日本では、英國の如き高度の段階に在る國と違つて、中産階級が没落しつゝあることは打消しえざる傾向ではあるが、その没落の速度は當初豫言されたほど急激ではない。英國では労働者階級は全人口の七六パーセントの絶對多数を占め、新舊中産階級を併せても二〇パーセントを超えない。曾ての露西亞は絶對的の農業國であり而も大地主の國であつた爲に、前資本主義の代表型として中産階級の數は云ふに足りなかつた。然し露西亞ほど幼稚でなく英國ほどに高度でない中間國家は、例へば獨逸の如く四三パーセントの中産階級を包有し、日本も亦此の範疇に屬するのである。かゝる中間國家では英國や舊露西亞の如く勞資兩階級が對立すると云ふ單純な形式に收めることが出来ないで、少数の大資本家階級があると共に多数の労働者階級があり、その中間に之と劣らざる多数の中産階級が存在する。大資本家階級がその人員は少いが富力を提げて資本主義の現状を維持せんとするならば、労働者階級は資本主義の後に來る社會主義社會を嚮望する。而して中産階級の希望

は資本主義の現在にも未來にもなくて、曾ての資本主義——大資本家階級の壓迫なく協同組合の脅威なき——に還元することにある。此の點に於て中間國家の社會構成は複雑多岐である。若し更に中産階級を細分して古き中産階級と新しきものとするならば、新しき中産階級は一部大資本家階級と結合し、他の一部は労働者階級に加盟する。況んや中間國家に於ては自由主義以前の殘滓たる國家主義群なるものがあつて、前記の社會層とも異なる立場に在つて、或は獨立に或は何れかの社會層と結合して、社會を左右する強大なる勢力を持つてゐる。全社會に利害が交錯する微妙なる關係は、所謂勞資の二大陣營に分裂すると云ふ簡単な説明を以て盡しえないものがあるのである。

以上述べた所を一言に要約するならば、吾が國も亦資本主義國の一つとして資本主義より生ずる問題の全部を遺憾なく持つ上に、更に吾が國が資本主義發達の特殊の段階に在る爲に特殊的問題が附加されてゐる。かくて之を横に切斷すれば農村と都市との對立があり、之を縦に切斷すれば廣大なる中産階級層を介在して、大資本家階級と労働者階級とが對立し、此の對立より結果する苦難は労働者階級の上に累積してゐる。之等の現象の存在自體が既に社會的不安を

生ずるに餘りあるが、日本に於て不安を更に不安ならしめるのは、社會的不安の存在を認識して、不安の由來を解説しその克服を指示する指導原理の缺如してゐることと、かゝる指導原理の實現を任務とする負擔者のないことである。人はどれほどの困難に呻吟しようとも、前途に希望と光明とを持つならば、現在の苦境を耐忍しえないことはない。然るに日本に於ては暗夜に輝く一燈をさへ見出しえないで、唯前途不測の混沌に放擲されてゐる、之が社會的不安を増大する特殊的原因である。

此の不安は敢て今日に始まつたことではない、明治の末期より既に發生して最近に至つて特に尖鋭化したのである。然るに滿洲事變勃發以後最近一二年間は、却て社會的不安の聲を減じたやうに見える。それでは社會的不安そのものが解消したのかと云ふならば決してさうではない。若し國民主義擡頭の爲に社會的不安が影を潜めたとするならば、それは單に注意を社會的不安から國民主義に轉せしめたに止まつて、變化したのは關心の對象であつて、社會的不安そのものではない。耳に國民主義を聴きながら、眼に身邊の苦境を見る時に、國民は久しからずして再び社會的不安に還元するだらう。日滿經濟ブロックや軍需工業の繁榮や圓爲替安による

輸出の増進や、多少のインフレ景氣は、夫々何等かの濕ひを各階級に投じたに相違あるまい。然し現在の社會的秩序の基礎の上に立つていかなる濕ひがあらうとも、それは一時の斷片的利益を與へるに止まつて、社會的不安自體を解消することにならない。若し言論の×××爲に社會的不安の聲が壓へられてゐるならば、その聲なくしてその實が無氣味の沈黙の裡に潜んでゐるのであつて、危険なること之より大なるはない。社會的不安の非常時性は、その事柄事體の重大性の外に、今日に於て多くの人が之を看過してゐることに在る。

日本が常正の進行を爲しつゝある時でも、社會的不安を克服することは緊急の必要事であるが、第一の非常時狀勢即ち一九三五年の會議の決裂、それより生ずる戰爭の危険性、を目前に控へる今日に於て、社會的不安は一層重要視さるべき値がある。社會的不安が戰爭に與へる影響を考へるならば、戰爭の初期に於てこそ一致團結しようとも、戰爭の經過に伴つて國內の複雑なる對立は、續々として頭を擡げるだらう。然るに日本が臨まんとする次の戰爭は、かゝる危険なる國內の結束を以てするを許さないほど、國家の安危を賭するものなのである。又日本の對手國は今でも日本の國防力を検討して餘蘊ないだらうが、歐米諸國人は日本人よりも國防

力を測定する場合に、國內の社會的不安を重要視するに違ひない、かくして日本の發言力と迫力を弱めることになるだらう。次に戰爭が社會的不安に與へる影響を考へるならば、世界大戰中に於ける獨逸露等の國內狀況を反省すれば足る。ビスマルクは獨逸國內の複雑なる社會關係を考へて、獨逸の爲には絶対に戰爭を避けねばならない、若し獨逸が外敵に對した時は獨逸の内部が分解する時だと云つた、彼はかくして一意獨逸の爲に平和を熱望した。ビスマルクがかく考へたのは、普佛戰爭後獨逸隆盛時代であり、而も威重全獨逸を壓したかに思はれた鐵血宰相がかく考へたことに、吾々が慎重に玩味すべき値がある。一九一八年の十一月に獨逸は崩壊したのではなくて、實は一九一四年八月に獨逸は崩壊したのである。

一九三三年の日本の社會的不安は、他の時期の社會的不安と同視されてはならない。第一の非常時狀勢との聯關に於て把握されねばならない。而も今日日本は此の國內的不安を抱いて、刻刻として危険なる道程を辿りつゝある。

(三) 政治的不安

だが非常時の状態は以上の二つを以て盡きてはゐない、こゝに第三の非常状態がある、それは政治的不安である。第一次西園寺内閣以來議會主義は、日本の政治的原理と一般に考へられ、たとへ議會を基礎とせざる内閣が成立したとしても、或は異例として黙過されるか、或は憲政擁護運動によつて倒壊されて來たのであつた。然るに現在の日本では議會主義が懷疑され、××獨裁主義を眞剣に唱へるものが出て來た。曾て國民はいかなる政治が行はるべきか、誰が政治を行ふべきかに就て、その意志を發表する權利を與へられてゐた。所が現在はその人の思想が何であり、その人の綱領が何であるか少しも知られてゐない人物が、突如として現はれて六千萬の國民の運命を左右するかも知れない。而して國民は之に就て一言も挿む餘地ない立場に置かれてゐる。誠に奇怪なる政治的状态である。

若し憲法によつて設けられた帝國議會の眞意義が國民に信條として把握されてゐたならば、今日の如き政治的不安は發生しないだらう、政治機構を改革することの必要は時に應じて起らうとも、それは議會主義の根本的立場に於てその趣意を全くする爲の改革であつて、議會主義か××獨裁かの二者選擇の途には立たされなかつたらう。日本の自由主義が歪曲された自由主

義である爲に、遂にかゝる破綻曝露するに至つたのである（本書第十二章「自由主義の再検討」参照）。然し不幸は議會主義が權威を失つたと云ふだけではない、更に不幸なことは國民の絶對多數が議會主義を放擲して獨裁主義に轉向したことでなくて、一方に獨裁主義を謳歌するものがあると共に、他方に議會主義を固執するものも亦多數あつて、その勢力の比較が必ずしも豫測を許さないことにある。かくて議會主義と獨裁主義とは、何れも決定的ではなく雙方が立ち竦みの状態に在る。六千萬民衆の運命を左右する政治機構は盲目的に擧げて宿命に委されてゐる、之が非常時状態でなくて何であらう。若し革命前の露西亞の如く、議會主義が皆無であつたならば、此の不安は起らないし、又若し英國の如く議會主義が不拔の信條になつてゐるならば、それでも此の不安の起る餘地はない。英露何れでもない日本は、歪曲されてゐるが自由主義はあつた、自由主義はあつたが歪曲されてゐた、此の結果が遂に此の不安を生んだのである、こゝにも中間國家の悲哀がある。

人は或は英國に於てさへマクドナルドの國民内閣が成立して、議會主義は没落しつゝあると云ふ。然し議會主義の眞諦は國民の意志を問ひ、その多數の意志によつて政治を行ふことに

ある。國民内閣は保守自由兩黨の絶對多數の支持によつて成立し、總選舉に於て改めて國民の意志を問ひ、更に絶對多數の支持を確立したのである、その中に反議會主義の何ものも見出されない。なるほど總選舉の際には廣汎の範圍に國民の委任を要求したらう、然し此のことは少しも議會主義とは矛盾しない、非常時に變通應機の權限を求めることは當然であり、而もその政策はその後一々議會の承認を求めてゐるのである。若し數政黨が聯合内閣を作ることゝを以て異例だと云ふならば、なるほど異例には違ひないが、十九世紀初めのサー・ロバート・ピール以來政黨の聯合は決して珍らしくない、このことも決して獨裁主義的傾向と云ふには當らないのである。人は獨逸のヒットラーを以て獨裁政治家と云ふが、こゝに看過してならないことは、ヒットラーは一九一九年以來十四年間國民社會主義黨を率ゐてその政綱を明示し、國民の意志に問うて二千萬の投票を獲得したのである、之を以て單純に獨裁主義の政治家と云ふのは正確ではない。ムッソリーニに至つては獨裁政治家の名稱に該當するだらう、だが彼さへも曾ては社會主義者として後にはファシストとして、その思想その政綱は國民に理解されてゐた。彼れの羅馬への進軍は突如として起つたのではない。然るに日本に於ては獨裁主義を唱へ

るものが擁立するものが誰であるかさへ不明であり、その人の思想もその綱領も國民は毫も知らされてゐない。此の場合に於て國民の意志は唯無視され蹂躪されてゐるのである。若し獨裁政治が實現したとするならば、その場合は國民が權力に屈從した場合か、或は政治に絶望して虚無的になつた時である。かくして議會主義と獨裁主義との對立は、尠くとも日本に於ては、思想と無思想との對立であり、言論と強權との對立であり、理性と力との對立であり、目的意識と盲目的宿命との對立である。更に力を以て始まる政治は、力を以て續き、又力を以て倒れるの外はない。その結果として力と力との修羅場が演出され、かのフランス大革命當時の如く、より過激なる集團へと政權が轉移し、殆ど收拾すべからざる混亂に陥るだらう、こゝに於て議會主義と獨裁主義との對立の、遂に歸着する所は、規律と無統制と秩序と混亂との對立となる。日本が直面しつゝある政治的不安の核心はこゝにある。而も國民は之を意識することなくして、刻々として危険なる道程を辿りつゝある。

(四) 共產黨の復活

今少しく展望の時間を延長して七、八年の前途を思ふ時そこに第四の非常時勢が認められる、それは共産黨の復活である。今でこそ共産黨は相次いでこの檢舉によつて殆ど壊滅し、共産主義の陣營にも轉向派と反對派との分裂があるが、社會的不安が絶滅しない限り、共産主義は根絶することはあるまい。社會に千や二千の共産黨員があつて地下に潜行運動を續けても、社會の多數成員の信條が動搖しない以上は、警察の力を以て彈壓することが出来るし、憂ふべき社會的勢力とはならない。然し一度社會の多數者の基礎が動くならば、共産黨は再び擡頭することに違ひない。共産主義の思想には多少の變化があるだらうが、結局共産主義たることに差異はあるまい。共産黨が復活するか否か、その勢力がどの程度に及ぶかは、一に前三項の非常時勢の克服如何に條件付けられる。若し社會的不安が持續して、之に戰爭状態が附け加はり、更に政治的不安が低迷するならば、共産黨は擡頭に就ての恰好の條件をえたものと認めねばならない。

私は理論上に於て共産主義に反對であるが、今は共産主義の良否の検討を別とするも、共産黨にして復活するならば日本を驅りて不測の混亂に陥れることとならう。資本主義發達の特

段階に在る日本は、前に述べた如くに複雑な社會層より成立し、プロレタリア階級のみを以てしては到底社會を左右するには足りない、従つて共産黨の復活は社會不安の解決とはならないで、結局混亂を白熱化するに止まり、之と對立する右翼主義的勢力を激昂せしめ、想像するに堪へないほどの深刻なる迫害を持ち來し、その餘勢は舊に共産黨に對するのみならず、全社會を極端に反動化せしめるに過ぎない。現在に於ても共産黨は彈壓されてはゐるが、それは法規に基き警察の活動に托されてゐて、別に社會的迫害と云ふべきものは少い。之は右翼的勢力からみて共産黨は厄介なものではあるが、今恐るべき勢力を占めてゐると思はれないからである。此の意味に於て共産黨は右翼的勢力と對立するには、餘りに輕視され無視されてゐるのである。古き自由主義とその上に立てる支配階級が、正面に對立するものと考へられてゐるからである。然し若し共産黨が勢力を増して復活する際には、右翼的勢力と正面に對立し、その抗争の激烈なることは恐らくナチス治下の獨逸以上であらうと思ふ。共産黨の復活はその事自體が舊に望ましくないのみならず、その及ぼす影響に於て寒心すべきものがある、之れ此の問題が非常時性を持つ所以である。

(五) 非常時克服の負擔者

私は以上に於て日本の直面しつゝある非常時狀勢が決して一九三五年の危機に止まらないで、更に第二第三第四の非常時狀勢の存することを擧げ、その相互間の聯關に云ひ及んだ。苟くも一身の安逸を貪ることなく、社會公共を關心事とするものは、その眼を掩ふことなく之等四項の非常時狀勢の何れをも餘す所なく認識し、之をいかに克服すべきかを苦慮せねばならない筈である。然し不幸にして非常時狀勢の全面を認識するもの、殊に社會的不安を重要視するものはその數に於て決して多くはないのである。

社會的不安の克服を力説するに適當なものは、無産政黨と労働組合と農民組合だと思ふが、此の際に之等の團體の威力が衰へて、その發言が顧みられないのは、嘗に労働者階級の爲に遺憾なばかりではない、日本全體にとつて誠に不幸である。然しこゝに特異の觀點から社會的不安の克服を主張するものがある、それは荒木陸相によつて代辯される軍部諸氏である。所謂軍部が統一ある團體かどうかには就ては、道聽塗説歸一する所を知らないが、暫らく之を統一團體

として新聞紙の傳へる所によれば、荒木陸相は五相會議以來國內對策を提唱し、全陸軍は之を支持してゐると云ふ。私は軍部の諸氏が問題を提げてその解決を促進することに就ては、感謝こそすれ反對するのではないが、若し軍部が独自の對策を提げて自ら實行の衝に當るとするならば、遺憾ながら反對せざるをえない。此の場合に當然議會主義か獨裁主義かと云ふ問題を伴ふであらうが、それを暫らく別とするも、軍部が政治の中心勢力となつて、その政策を行ふことに反對する論據として次の數點がある。

第一に軍人諸氏にとつて軍事は獨特の専門であり、吾々國民は此の點に就て絶対に諸氏の技能に信賴する。然し此の専門に精進すればするほど、社會的不安を検討しその對策を講ずる餘裕があるまい、餘暇を以て爲すには問題は餘りに複雑だからである。若し軍部の中に社會問題の専門家があるとすれば、現在の軍部はかほどの過剰冗員を有するものと思はねばならない。固より軍人諸氏も社會の一員であり、その將士は何れも中産階級か労働者階級に屬する、従つて社會的不安を身自ら體驗してゐるだらう、然し之は一市民として聲を揚げることを資格付けることにはなるが、政治家として衝に當ることを正當付けることにはならない。第二に若し獨

自の見解が社會問題に對して持てないとすれば、當然の結果として平生の専門たる軍事的立場に立たざるをえまい。而して此の立場より社會的不安を克服しようとするだらう。社會的不安と戦争とが密接の聯關を持つことは前に述べた通りであるが、思ふに軍人諸氏が社會的不安を關心事とするは、軍事的立場からみて社會的不安を忽にしえないからであらう。然し社會的不安と軍事國防とは密接の關係はあるが、此のことからは社會的不安を軍事的立場から解決してよいと云ふことにはならない、若し軍事的見地に於て社會的不安の解決に着手するならば、當然に生産力本位能率本位に立つだらう、結局その被害者は弱者たる労働者階級とならざるをえない。之こそが正に私の反對せんとする所なのである。固より一旦緩急の場合に軍事的目的の爲に國力を總動員することは正當であり、その際戦時經濟軍事經濟を現出するだらうが、之は臨時の戦時經濟たるに止まつて、社會的不安の解決にはならない。社會的不安は非常状態ではあるが、臨時非常に解決すべきものではなくて、永久的の解決を爲さねばならないのである。

第三に若し獨自の見解もなく、軍事的立場にも立たないとすれば、社會的不安の専門家を招いてその意見を聴くの外はあるまい。然し此の場合にも指揮命令と絶對服従との規律に育つた

軍人諸氏が、身を謙虚に持して寛容に夫々の専門家に傾聴するか否か疑はざるをえないのである。社會問題の如きは、複雑微妙なる人心の機微を洞察する哲人政治家の能力を必要とするもので、此の種の能力が軍部といふ社會の雰圍氣と調和するものではない。一九一六年から二年間獨逸の獨裁政治家であつたリュースドルフは、軍人としては非凡な人材ではあつたらうが、政治家としては成功しなかつた、獨逸の崩壊は彼れの犯した數多き過失に原因する所が少くなかつたのである。最後に軍人諸氏が政治の衝に當つて若し失敗するとせば、その反動として國民の不信は政治家としての軍部に止まらないで、軍人としての軍部にまで及ぶだらう。之が軍部の爲に遺憾なるのみならず、日本の國防の爲にも遺憾な結果となり易い。曾て數年前軍人諸氏が不人氣であつたのは、軍人出身の藩閥政治家に對する反感が廣く軍人全部に及んだのであり、今や軍人に對する感謝と信頼とが回復した時に、又再び舊時の覆轍を踏まざらんことを祈らざるをえない。私は軍部諸氏に毫も反感を持つものではない、寧ろ専門の軍事以外にも出でて、祖國の大事を關心事とする熱情に對して、尊敬もし感謝もするのであるが、諸氏の愛國の至情に訴へて、敢て軍事の専門領域を固守されんことを切望するのである。

社會的不安の解決は武人によつて爲さるべきでなく、須らく文人政治家によつて爲さるべきである。

それでは議會政治家は非常時狀勢をいかにみてるか。鈴木若槻の兩總裁は最近の地方大會に於ても、何れもファッシズムを排撃し議會政治を主張したと云ふ。私は議會主義者である、従つて議會主義に異存のあらう筈がない、だが然し敢て諸氏に聴きたいのは、諸氏がその議會主義に於て一貫してゐるかどうかである。議會主義の眞諦は民衆の自由なる意志に問うて、その多數の意志によつて政治を行ふことにある、果して今日の選舉の投票が民衆の自由なる意志の表現だと云ひ切れるか、議會主義者は議會主義の上に立脚して、今日の選舉制度を改革せねばならない筈であるが、諸氏に果してその熱意があるかどうか。又議會政治は當然の前提として言論の自由を認めねばならないが、諸氏はその在朝の時代に言論の自由を壓へることが皆無であつたか。又議會政治は單に政治の便宜よりして獨裁政治よりもより良いといふのではない、便宜は便宜の爲に捨てられねばならない、然し議會主義の存在理由は別にある、あらゆる社會の成員をして、自己の社會の問題を認識せしめ検討せしめ批判せしめ決定せしめること

が、凡そ人としての成長に必要であり、而して各人格の成長を爲さしめることに社會存續の目的があると云ふことよりして、議會政治は道德的根據を持つのである。人は便宜だと云ふ理由で、議會政治を死守しうるものではない、道德的根據あればこそ議會政治は古來死守されて來たのである。若し諸氏にして眞に議會政治を死守せんとせば、此の根據に立たねばならないと思ふが、若し果してさうならば、今日の日本のあらゆる民衆は人としての成長を爲しうる状態にあるだらうか。前述した社會的不安の中に於て、人は安んじて成長することが出来ない。議會政治を主張する根據そのものは、必然に諸氏を驅つて社會的不安の克服を爲さしめざるをえないのに、諸氏の口より第二の非常時狀勢に就て根本的對策を聴くことなきは如何。凡そ吾々の立場は兩刃の劍の如くである、一刃を以て敵を斬ると共に、その劍は當然に他刃を以て吾れ自らを斬らねばならない。諸氏はファッショを排撃して議會政治を主張する時に、その必然の歸結が自己の任務を鞭つことになることを意識されたであらうか。議會政治家によつて社會的不安が説かれずして、之を荒木陸相の得意の壇場たらしめることは、誠に文人政治家の恥辱であらねばならない。

(六) 非常時克服の要件

非常時状態の非常性は單に事態の重大性にあるのではない、状態を全面的に把握し、之に對する對策を提供するものがないことにある。たとへ國民の全部が一致して賛成しえない對策であらうとも、何等かの對策が與へられるならば、國民は現在の生活が社會の動向といかなる關係に立つかを理解して、安心して生活を營むことが出来る。然るに日本に缺けるものは、非常時状態を克服する對策のないことと、克服を使命とする負擔者のないことである。かくて國民は歸趨に迷つて暗中に摸索するの外ないのである。英國獨逸の勞働者階級が曾てその苦境を耐忍しえたのは、勞働黨や社會民主黨があつて、今こそはその勢力は微弱であらうとも、自分等の努力如何により之を強大にすることによつて苦境を打開しうると云ふ希望を抱いたからであつた。

所謂對策は二つの要件を必要とする。その一は生活の現状に即した具體的實際的なものでなければならぬと云ふことであり、その二は對策の相互が有機的に結合されて、統一的全體を形成すると云ふことである。對策は與へられた現在の状態に立脚して、實行しえられるものでなければならぬのに、徒に架空の對策を列挙して、現在に接續する明日の生活に妥當しえないものゝ如きは、觀念の満足を享有しうるに止まるか、或は自己の主義との矛盾を回避しうるに止まつて、吾々の必要とする對策ではない。かのマルクス主義者の提出する對策に此の種の弊が尠くない。同時に對策は單に斷片的に列挙されるに止まつて、有機的聯關が缺けてゐてはならない。かの官僚の提出する對策は現實に立脚してゐることは認められ、具體的實際的と云ふ要件を具へてはゐるが、その缺點は今日に接續した明日の對策にはならうが、明後日の對策と云ふならない、明日と明後日との對策の間に何等の連絡がないのみならず、外交に於ける對策と産業に於ける對策と軍備に於ける對策と社會問題に對する對策等、凡そ一切の對策相互に有機的聯關がないことである。かの農村匡救費の如きは、今日の農村に相當の濕ひを投じたことにはなつたらうが、匡救費が今後いつまで繼續するか不明である爲に、單に一時の生活を糊塗しえたに止まつて、社會的不安を除去することに少しも役立たなかつたのは、對策があるべき要件を缺いてゐるからである。

だが今日に必要なのは、夫々が具體的でそして相互に有機的關係ある對策だけではない。對策を指導し方向付ける一定の社會哲學或は世界觀が與へられることである。實に之を前提として始めて個々の對策が生れ相互間に有機的統一が保たれうるのである。所謂世界觀或は社會哲學は、何が社會の理想であるかを明白に指示して、國民をして現在の社會と對立した未來の社會を意識せしめ、往くべき社會の動向を決定する。かゝる世界觀あることによつて個々の對策が果して妥當なるか否か、終局の根據に立つて取捨選擇されるのであり、又たとへ一個の對策が豫期の効果を生じなかつた場合にも、それは當該對策の過失たるに止まつて、國民は一末節に失望はしようが往くべき未來社會の實現に希望を維ぐことが出来るのである。歐米殊に獨逸の政黨の綱領をみて、吾々の驚嘆することは、何れの政黨も皆堂々たる世界觀を提げ、理想社會と現實社會とを接続するものとして、各個の對策が標榜されてゐることであり、翻つて日本の政黨をみる時に、それに全然缺如するものは世界觀である。

こゝまで非常時日本に必要なものゝ二つ、即ち世界觀と對策とを擧げて來た時に、日本がその何れをも生むに不適當なることを見出すは遺憾でなければならぬ。對策を生むには現實の

社會に關する豊富なる資料がなければならぬが、それが正に日本の何れの場所にも缺乏してゐるのである。比較的正確であり全國的に互る資料を持つものは官廳であらう、然し官廳の所有する資料は徒に死蔵されるに止まつて、歐米諸國の如くに出版して公共に販布されてゐない。更に官廳の資料さへもその時々蒐集した断片であつて、統一した方針に基いて必要な事項を網羅してはゐない。かくて日本の對策を論ずるものは、自己の狹隘なる個人的見聞を基礎とするか偏奇した地方的一部の資料を根據とするの外なく、異る資料の前提の上に立ちて、結局水掛論に終らざるをえないのである。此の點に於て遺憾なのは、歐米諸國にみるが如き大學に附屬した社會經濟に就ての調査研究機關のないことである。日本は夙にかゝるインスタチユートを所有すべきであつた。更に世界觀を顧る時に國民の間に、世界觀の必要を感じるものもなければ、所要の世界觀を提供するものも尠い。たとへ世界觀を持つものも、それを現實社會との聯關にまで持ち來して、對策を生むことにまで活用しうるものがない。これ一に日本の教育制度の根本的缺陷である。下は小學校から上は大學に至るまで、日本の教育機關の何れに於て、世界觀を教育し世界觀への關心を刺戟するものがあらうか。かくて國民はその日暮しの

生活をなすべく準備付けられてゐるのである。

資料を所有する官廳の官僚は、幾多の對策を生むことが出来る、然し對策愈々多くして何れの對策に決定するかは懊惱愈々多い、これ官僚に世界觀がないからである。哲人は世界觀を與へることが出来るだらう、然し彼は資料を所有しないし、現實社會への關心すらも持たない。狹隘なる専門に限局された技術家はある、然し彼は技術が何の爲に存在するかを知る思想家ではない。思想家はあるが彼は迂遠なる腐儒たるに止まつて、現實を洞察し指導する實踐的能力に見捨てられてゐる。之を社會全體にみれば、俗人と哲人と、技術家と思想家と、テクノロジーとイデオロギーとを連絡する人もなければ設備もない。之を各個人にみても凡そ一人格に調和さるべき二つの能力が、夫々各人に切斷されて統一されてゐない。非常時日本に直面して、日本の根本的缺陷を痛感せざるをえないのである。

(七) 國策調査會の提唱

だが然し非常時日本を前にして、徒にその缺陷を嘆息するも詮ないことである。非常時日本

は緊急に克服を必要とするからである。私は前に非常時日本に必要なものとして、一は世界觀であり二は對策であると云つた。對策を生む爲に必要な資料は比較的官廳に備へられてゐる、然し官僚に缺けたるものは世界觀である。此のことを考慮に置いて私の提案は、現内閣が國民の智能を動員して國策調査會を設置すべしと云ふことである。この調査會は英國の王立調査委員會の如くに、世界觀の異なる各方面の人材を網羅し、官廳の所有する一切の資料を提供して、自由なる活用に任せ、同一資料の上に立脚して對策を案出せしめるのである。更に英國の委員會の如くに調査會は必要な場合には、日本に於けるいかなる人をも招致し、いかなる資料をも提供せしめる権限を持ち、招致されたる人は裁判の法廷に立てる證人と同じく、正確に一切を陳述する宣誓をなし、若し虚偽の事實を申立てた場合には偽證罪を以て起訴しうるものとする。又調査會は否氣な討論會ではなく、非常時克服の任務を持つが故に、徒に甲論乙駁に時日を経過することを許されないから、多くとも六ヶ月の期限を付して、成案を報告せしめねばならない。報告は機密に互らな限り調査會の陳述討論の一切の速記と共に印刷刊行して民衆に公表する。然し始めより異なる世界觀を持つ人々の集合であるから、之を一個の報告に纏める

ことは至難でもあり又その必要もない、多数派報告と少数者報告或は中間派報告の二又三の報告あることを妨げない、各々公表して公衆の批判に置くのである。

人は之を聞いて又かの調査會かと云ふかも知れない。然し従來の政府の調査會は調査會自体に缺陷があつたのではなく、調査會の組織と方法とに缺陷があつたのである。第一に従來の調査會は政府に一定の成案があつて、それを議會に通過せしめる目的を持つたのであり、此の目的の爲に委員の人选が限定されてゐるのである。然し此の調査會はかゝる區々たる目的を持つものではなく、國家の非常時打開の爲の調査會であるから、一切の知能を動員せねばならない。第二に従來は政府の成案に都合悪き資料を隠蔽して、調査會の自由なる使用に任せなかつたのである、然し此の調査會は前述したやうに、政府及び民間が一切の資料を餘す所なく提供することとせねばならない。第三に従來は無理にも一個の結論に纏めようとした爲に、各々異なる立場より提出された對策の雜然とした寄木細工となつた、然し此の調査會は元來が一定の世界觀に指導された有機的一體としての對策を生むことを目的とするのであるから、始めよりして數種の異なる報告を豫想する、不統一の對策の羅列を許さないのである。

人は又云ふかも知れない、外交軍備の如きは一日も早く着手すべきであつて、六ヶ月の時の経過を許さない。私も亦此の説に賛成する、従つて軍備と外交とに關しては、臨時殺急の課題として、調査會の進行と分離して決定し、一日も早くその實行に着手すべきである。而して外交軍備の對策としては、第一に日本がこれ以上讓歩しえざる最少限度の國際政策を確立することである。滿洲國の獨立と南洋諸島の保持とがそれであらう。此の二つ殊に前者に就ては異論を挿むものがあるかも知れない、然しそれは既に帝國議會に於て承認された政策であり、それを變更することは、徒に國內の混亂を惹起するに止まるから、與へられたる既成狀態として此の二つを確立した方がよからう。第二に此の戦線を防衛しうる軍力がどれほどのものかは、軍事専門家の言に聽くの外はない、軍事當局は術策を弄することなくヤマを賭けることなく、正直に淡泊に所要の兵力量を述べべきであり、國民は之を是認するならば、一致して支持した方がよい。第三に絶対に戦争を回避するといふ方針を確立すべきである。以上の二要求と此の第三の方針とは必然に矛盾すると思ふかも知れないが、私はその間に調和の餘地がなくはないと思ふ。それには一は國內に對する準備工作と、一は海外諸國に對する準備工作を必要とす

る。前者は政治家の任務であり後者は外交家の任務である。緊急に着手すべき軍備外交に對して、以上の三方針を確立して、その後の外交軍備を含めて調査會の調査項目は、政治的不安除去の爲の政治機構の問題と、社會的不安を除去する爲の労働、産業、金融、財政、行政、教育の六項目を網羅せねばならない。若しか、る調査會を設置することが出来るならば、之だけを以てして齋藤内閣は非常時日本に偉大な貢獻を爲すものと云へるだらう。異例なる超黨派的聯合内閣たる齋藤内閣に適當した事業は正にかくの如き調査會の設置であり、之が非常時内閣の使命であり存在の理由である。若し調査會をして報告を提出せしめうるならば、その實行の任を後の内閣に譲らうとも、現内閣は安心して極樂往生を爲しうべきである。

調査報告は大體二つ又は三つの種類を豫想しうる、從來と異なる調査報告であるだけに、右翼又は左翼と云ふ範疇を以て分類することは困難ではあらうが、大體保守的なものと進歩的なものと中間的のものが現はれるに違ひない。各政黨が報告の何れを支持するかを明かにした後、政府は英斷を以て議會の解散をしたがよい。今の議會は滿洲事變後犬養内閣の總選舉によつて成立したのであるが、事變後僅かに數ヶ月を経たに止まり、今日の非常時狀態は當時とは

比較にならないほど進展してゐる、一九三五年の軍縮會議を前にして、國民はその總意を新しく明白に發表すべき機會を與へられねばならない。人は或は此の非常時に議會を解散するが如きは徒に混亂を累ねるに過ぎないと云ふかも知れない、然し私の見解によれば、第一に總選舉によつて國民の政治的關心は緊張する、今の國民の政治的意識の弛緩がファシズム擡頭の好條件なのであるから、此の際政治的關心を喚起することは、政治的不安を除去するに役立つに違ひない。第二にその總選舉は從來と異つて、一定の報告に對する去就を國民に問ふのであるから、政黨の分野に尠からざる異動を生ずるだらう。それが政界に鮮新性を與へると共に政局に安定を與へ、少數黨は失望しようとも一定の對策を國民に訴へたことによつて未來に希望を持つことが出来る。第三に一九三五・六年の非常時に國民の總意が發表されてゐることは、外國をして日本の民衆の意志の何處に在るかを知らしめることが出来る。之等の効果はたとへ多少の混亂があらうとも、之を償つて餘りあると思ふ。

若し軍部始め右翼團體にして、欲するが如き對策の政黨を見出しえないと思ふならば、宜しく自己の欲する新政黨を樹立すべきである。現役の軍人が政黨運動に奔走することは許されま

いが、軍部は老大なる外廓團體を持つてゐるからその人とその資とに乏しくはあるまい。而して軍部は特有の世界觀を持つてゐるから（本書第二章「五・一五事件の批判」参照）、かゝる新政黨の出現は、世界觀を持たざる既成政黨と對立して、日本の政黨史上に一轉機を劃するだらう。

人は私の提案を或は突飛として或は迂遠として一笑に附するかも知れない。然しその人は非常時日本が不氣味の裡に辿りつゝある危険な道程と、社會のあらゆる勢力が平衡状態にあつて、何れも立ち竦みの悲境に陥つてゐる現狀と對比して、私の提案が或は直接に或は間接に持ち來す効果を考慮に置かねばならない。

(八) 結 論

以上私は非常時日本の實相とその克服の方法とを述べた。その克服の方法に就て異論は起らうとも、非常時の實相がいかに深刻なものかに就ては異論があるまい。誠に日本の建國以來稀に見る難局に吾々は遭遇しつゝあるものと云はねばならない。歐洲大戰後の世界の混亂は、百

年二百年に唯一度しか廻つて來ない歴史的事件であらうが、日本が直面しつゝある難局は世界の各國のそれよりも更に倍加したものと云へるだらう。生を祖先に受け子孫に次ぐ吾々は、此の時代に生れて對策の機宜を失したならば、祖先と子孫とに對して見ゆるの面目があるまい。此の時代に成年期にあるものは、今こそ起つて同胞の爲に身を致さねばならない。

然るに吾々の身邊を顧みる時に、大多數のものが口に非常時を唱へながら、唯言葉の感傷に耽るに止まつて、恰も對岸の火災の如くに袖手傍觀し、徒に左を顧み右を盼めて、他人の努力を待ち望んでゐる。日露戰爭以來二拾數年の平和が、國民を化して此の安逸盤居に驅つたのであらうか。それもあらう、然し日本の國家主義の教育が一因を爲すことを看過してはならない。國家主義は祖國に對する熱情を鼓吹したらう、然し各個人が自ら思慮し判斷し行動するまで、各人の自覺を鞭ちはしなかつた。人より人により命令し指揮された時、それに追隨し服従する美德は教へたらう、然し自らが率先して能動的役割を演ずる教育をしなかつた。平和の時はそれで済んだ、戦場で命令される時もそれで済んだ。然し時局艱難の時複雑多岐の問題に向つた時、多數の國民をして受動退嬰ならしめることにならなかつたか。祖國に對する熱情を最

も必要とする時、國家主義は自らが賤いた種を刈らざるをえないとは、悲しむべき矛盾でなければならぬ。

だが國家主義だけではない、マルキシズムも亦その責任の一半を負はねばなるまい。マルキシズムが宿命論であるか否かに就ては議論があらう、私は結局宿命論に歸結すると思ふが、マルクス主義者は反對に辯護をするが、而も縷々辯護をせねばならないと云ふことそのことが既に、マルキシズムが宿命論の嫌疑を受ける不徳の資を免れないと云ふことである。單に宿命論でないことでは足りない、積極的に能動的に人を鞭つ世界觀こそ吾々の常時必要とするものであり、今正に日本が必要とするものなのである。然るにマルキシズムは正解に於てか誤解に於てか、多數者をして宿命的の傍觀主義に驅り立てた。日本に於けるマルキシズムは功罪何れをも持つが、之こそその罪惡の最も著しいものゝ一つである。

此の時に於て獨り軍人は戰場に生命を捨てる覺悟を持つのみならず、内政の改革にまで死を賭するの意氣を持つ。彼等がその職分を超える點に於て彼等の對策の内容に就て、私は彼等に反對ではあるが、その憂國の至情と公共への犠牲的精神とは、採つて龜鑑とすべきものがあ

る。軍人に對立するものは軍人に劣らざる意氣と情熱とを持たねばならない。人々の公共へ奉仕するの路は、その各々の職分によつて異らねばなるまい。然し武人生を捨てるの覺悟を持つ時に於て、文人政治家亦一身を賭するの決意がなければならぬ。

昭和八年十二月號「經濟往來」

(二) 五・一五事件の批判

(一) 緒言

此の事件が起つた時私は獨逸にゐたので、事件がどれ程日本の社會を震撼させたかを身自ら體驗することは出来なかつた。然し世人の此の事件に對する關心も、事件の起つた當時よりも最近に於ける公判の陳述によつて高められたのではないかと思ふ。新聞雜誌を通じてみても、又直接話した人の口吻からみても、此の事件は實に多數の人を感動させてゐるやうである。

此の事件は單に一回だけ起つた孤立的の事件ではなく、日本の廣大なる社會層に漲る思想の表現したものであり、たとへ事件そのものはどう結末が付かうとも、之に表現された思想は今後も永く命脈を保持してゆくであらう。此の運動の特色は右翼のイデオロギーの上に立脚して、社會を改革せんとし、而も改革を武力を使用する直接行動に訴へんとする所に在る。從來

社會の改革は左翼思想家の獨占の傾きがあり、右翼派は國家主義日本主義等を唱へて、主として倫理社會哲學等の領域に低徊してゐたのであるが、今や此の右翼思想よりして社會政治の改革が導き出された所に新しい發展があり、更に從來も右翼の改革思想が絶無ではなかつたが、單に改革案を提唱するに止まつてゐたのが、今や言論著作の範圍を越えて、武力による實踐にまで到達した所に、更に第二の發展がある。此の種々の思想を暫らく右翼改革論と名づけるならば、此の改革論は今後も共產主義と對立して、日本の巨大な社會群を支配して行くと思ふ、此の點に此の運動の注目すべき思想的意義がある。

右翼改革論が一般世人の共鳴を買ふであらうことは、極めて容易に首肯される。第一にそれは現代日本の弊害を突いてゐる。政黨の墮落、財閥の横暴、農村の窮乏、中小商工の衰頹、教育の萎微等一として世人の慨嘆しないものはない、五・一五事件の當事者は臆せず怯まずに端的に之を喝破してゐる。第二に然し之等の弊害をいかにして解決すべきかの對策は明瞭にされてゐない、弊害は突いてゐるが積極的の政策は茫漠として隠れてゐる。若し對策の全貌が明かにされるならば、人は何れかの點に反對を見出すであらう、然し何人たりとも反對されない程

政策の内容は漠としてゐるのである。第三に此の改革論の内容の中明かにされてゐる限りに於ては、日本人の大多数は反對すべき何物をも發見しないのである。之を左翼改革論に就てみるならば、國家の否定、×××の廢止、戰爭の反對、現存法律道德の否定等、從來教へられた思想と懸隔した餘りに多くの對立物を見出すであらう、然し右翼改革論にはかくの如き何物もない。國家の尊重、國體の尊重、軍備の擴張等は一般世人の共有の思想であり、世人は何等の無理なしに此の改革論に牽引されうるのである。

(二) 事件の擔當者の批判

私はマルキシズムに反對であると共に、右翼改革論に對しても亦反對である。此の改革論には局部的には共鳴しうべきものがないが、思想の全體の構造に於て吾々が賛成しえない幾多の難點を免れない。そこで右翼改革論の一表現として五・一五事件を抽出し、之を對象として私の批判を述べようと思ふ。

此の事件は三個の觀點から批判することが出来る、第一は行動の主動者が軍人だといふこと

であり、第二は武力を用ゐる直接行動によつたことであり、第三は當事者の立脚した思想の内容である。以下順次夫々に就て述べることとしよう。

第一に此の事件の主動者は軍人であるが、×××××軍人と云ふ特殊の地位に在るものが、かゝる行動を企てることが果して妥當であるかどうか。私は元來軍人諸氏に對して毫末も反感を持つものではない。日本を外國の脅威から防いで今日の地位に達せしめた功績の大半は、軍人の努力に歸しなくてはならないので、吾々は之に對して感謝の念を忘れてはならないと思ふ。従つて曾て軍人に對して非禮と思はれる程の不遇をした時代があつたが、私は輕薄なる忘恩だと思つて窃に心外に感じてゐた。又軍人は日本の社會群の中で最も純情な功利を離れた人々の集團であると思ふ。いかなる地位の人も社會に奉仕する點に於て差別はないとは云ふものの、一旦緩急の場合に家族を捨て生命を抛つ職能の人に對しては、吾々は特別の敬意を表すべきである。單に個々の人としても軍人の多くは、恬淡であり直情徑行であり情熱と氣魄との持主であり、私利私慾に汲々たるか空々寂々の生活を送るものの周圍に多い時に於て、軍人は優れた性格に富んでゐると認められる。だが然し軍人が今度の如き行動を採ることに對して

るの外に方法がない。多数が同意するのだらうといふ見込では、唯當事者の主觀的の判断に止まり、客觀的の基礎とは云へない。従つて革命主義は國民の大多數が背後にないと云ふ時にのみ云はれるので、若し大衆の援助があるならば議會主義を採りうる譯で、敢て革命主義を採る必要はない、大衆の後援と革命とは結合しえない對立物である。但しこゝに云ふ議會主義を採ることは、現存議會制度をそのまゝに是認することにはならない、議會主義の上に立ちその趣旨に副ふべき様に、議會制度は幾多の改革が爲されねばならない。尙此の兩主義の對立に就て詳述すべき細微の點はあるが、それは別の機會に譲ることにしよう。

上述の規定に従へば五・一五の當事者は、明かに革命主義の上に立つたのである、此の點に於て××××××××××である。私は左翼と右翼とを問はず、革命主義に賛成することは出来ない。その論據をこゝに一々述べることは省略するとして（本書第十章「議會主義と獨裁主義との對立」参照）、若し少數の人が是と信ずる思想を強行しようとするならば、それに参加しない人々は何等意見の發表を許されずして、改革の埒外に抛擲された譯である。然し社會は全成員の共有物であり、總員が社會改革に参加する權利と義務とを有するので、特定の一部のもの

のみが改革の特權を有すべき筈がない。日本の社會の改革を念とするものは、決して事件の當事者のみではない、然るに吾々は何故に同意を求められずして、改革の權利を剝奪されねばならないか。若しその少數者の思想のみが絶對優秀の思想なるが故に、自分等に任せよ汝等は傍觀せよと云ふならば、實はその思想の内容が公表されてゐないから、優秀の判断が云へないのみならず、それが絶對唯一の思想だと云ふ主張は、唯その少數者の主觀的の獨斷に止まつて、毫も客觀的の合理性はないのである。

かくして革命主義は、唯自己のみが正しとする自負心の上に立脚する。吾々には自己の思想に確信を持つ權利はある。然し他人の思想を排撃し他人の批判と検討とから自己の思想を隠蔽する權利はない。若し自己の思想に自負心があるならば、宜しく社會の批判と検討とに曝すべきである。かくて他人の批判を幾度か聴くことにより、ある點は修正しある點は愈々自信を強め、推蔽の結果は不動の確信となるだらう。かゝる徑路を踏まないからこそ、革命主義者は屢屢後悔し轉向せねばならないのである。轉向せねばならない思想の持主に、國家の大事を委託することは危険極まりない、若し破壊を終へた後に過失を見出したとするならば、その時は原

日本は今正に、意氣と情熱とを要すると共に、平衡を失せざる冷靜を必要とするのである、かくて私は事件の當事者の直接行動を遂に是認することは出来ないのである。

(四) 思想内容の批判 その一

最後に問題は事件の當事者の思想如何と云ふ検討に移る。之に對する資料としては僅に被告が公判廷で爲した陳述の外にはない、而して陳述は結局公判の訊問に答へたものに過ぎないものであるから、被告の思想の全部を披瀝したものは云へまいし、又その陳述の全部が刊行されてゐる譯ではないから、資料としては不充分ではあるが、大體に於て思想の輪廓が窺はれないではない。若し誤解があつたならば當事者の寛恕を乞ふの外はない。

事件當事者の思想を形式的方面と實質的方面とから觀察するに、形式的方面からみて此の思想には次の數點の特色がある。

第一に理想主義である。若し思想を目的論と必然論とに分つならば、此の思想は目的論であり、目的論を更に個人の利益を目的とするか、超個人的のものを目的とするかに分つならば、

此の思想は後者に屬するものであり、従つて理想主義に屬する。此の點は一般右翼思想に共通であり、唯物論必然論を採るマルキシズムと對立する。私は此の點に於ては右翼思想に共鳴するのであるが、唯一般に右翼派の理想主義は推蔽されてゐない爲に、名は理想主義でありながら實は却て理想主義に反することになり易いのは、後段國家主義の所で觸れる通りである。又理想主義を採るものの缺點は、現存社會の解剖を忽ち付することである。理想主義と科學的解剖とは毫も矛盾しないのみならず、寧ろ却て必然的關係を持つのである。

第二に日本主義である。外國の制度事例を輕視し外國の模倣を排して、日本特有の思想文化を尊重する點も亦一般右翼思想に共通である。此の場合に若し徒に外國を崇拜することを排して、日本にも採るべきものが多いと云ふならば、近時動もすれば外國文化に眩惑され易い傾向に對立するものとして私も亦同感である。又若し外國の文化を移植するはよい、然し日本の特殊の事情に適應せしめねばならぬと云ふならば、之にも亦私は同感である。然し一切の外國の文化よりも日本的のもののみが優れてゐると云ふならば、それを證明する客觀的根據が有りえないのみならず、徒に獨りよがりの誇大妄想と云はざるをえない、若しそれ日本的のもののみ

國家をその儘に肯定すると云ふならば、明白な保守主義として一應成立しえないことはない。然し論者も亦國家の革新とか改造とかを云ふのであるならば、現存國家を肯定するのではなくて、善き國家と惡しき國家とが區別されてゐる筈である、それならその區別の規準を何處に置くかと追窮するならば、結局國家の成員たる各人が人格の成長をなしうるや否やと云ふ點に求めるの外はあるまい、かくして國家主義は國家を最高の目的と云ひつゝ、國家自體を批判する別個の原理を援用すると云ふことになり、終局の原理ではないこととなる。次に國家の爲と云ふことは明白に國家と個人の利益とが對立した場合の決定原理にはなるだらう、それが最もよく現はれるのは戦争の場合である。従つて軍人は國家意識を常に強烈に感ずるだらうが、吾々の日常生活に於ては國家か個人かが明白に對立することは寧ろ尠いので、その大部分の場合には國家主義は生活原理にならないのである。之は軍人諸氏が飲食し戀愛し娛樂してゐる場合の生活原理を考へても、無意識の裡に國家主義ならざる別の原理を探りつゝあるを見出すであらう。私の考によれば過去の日本が國家主義を生活原理として教へ、大部分の生活を支配する原理を教へなかつた爲に、日本人の生活が頹廢するに至つたので、被告により政黨官吏の墮落と

して痛罵された現象は、國家主義が生活原理として不充分だと云ふ缺陷から由來してゐると思ふ。更に國家主義は國家と云ふ全體を第一義的に考へ個人を第二義的に考へる、固より個人なくして國家はないから、個人は全然無視されるのではない、然し唯國家に役立つ限り考慮に置かれるに過ぎない一種の反射的存在に止まるのである、之が國家主義者がどれ程社會問題の解決に關心を持つにしても、その改革に限界が付けられる所以である。更に國家と云ふ全一體が最も明瞭に人々の眼に映ずるのは、外國と對立した場合である、従つて國家主義者は對外關係に重點を置く、之が國家主義から帝國主義が導出される所以である。同時に國內の改革は第二次的地位にしか置かれぬ、之が國家主義が往々にして保守主義に陥る所以である。然し國家の統一に必要な限りは内政の改革を企てないでもない、然しその改革は國家の焦眉の念に應ずるのであるから、能率を專一に考へねばならない、之が獨裁主義となる所以である。要するに國家主義は右翼思想の根幹にして、後述の特色は殆ど皆之と密接の聯關がある。國家主義に就て尙述ぶべきことは多いが、それは別の機會に譲ることとする（本書第五章「國家主義の批判」参照）。

多い。その一として例へば特殊の問題に對する専門家が必要であるのに、議會にその人がなく又多數の合議機關がその所でもない、今日は専門家の必要な問題は事實上官僚が處理してゐるのである、而して官僚は官僚としての性質上、何等の指導原理と交渉なしに單純に技術的問題として處理してゐる。將來の問題は、議會の持つ政治的眼界と官僚の持つ専門家的技術とを調和した組織を考へることに在る。之に就ては改めて觸れることとする（本書前章参照）。

反議會主義の中に含まれる他の一は、統帥權の問題である。所謂統帥權が用兵作戰に關する權限とするならば、それが軍事當局者にあることは正當である。然し兵力量の決定をも含むとするならば、依然として大きな問題である。五・一五事件は他に幾多の原因はあるが、統帥權の問題を導火線としてゐる。軍人としては軍事に關しては至上の權限を持ちたいであらうが、何故に國民は國防の大事に就て口を塞がねばならないか、又何故に國民は軍事に關する豫算に就てのみは、意志を述べることが許されないであらうか。軍人は議會は當然に反軍事的と看做すやうであるが、若し國防の必要を國民に納得せしめたならば、英國の保守黨の如くに軍備擴張を標榜する政黨が出来ないことはない。統帥權の獨立を主張するよりも、寧ろ議會の内部

に國防の關心を強める方針を採る方が正道であると思ふ。

(六) 思想内容の批判 その三

第四は軍備充實主義である。軍備の充實は或は國家の獨立を維持するか、或は國家の膨脹を企圖するか、何れかを目的とする。日露戰爭を最後として前者の目的の爲にする軍備充實は既に必要が消滅した。今日世界の何國も日本の領土を侵害せんとするものはあるまい。従つて日本の將來の軍備は國家の膨脹を目的とするか、此の目的を妨げる外國の容喙を排除することを目的とするかにある。而して國家の膨脹も亦將來に起りうべき戰爭の爲の前進地帯の確保を目的とするか、日本の産業の發展を目的とするか、或は兩者を併せた目的かとなるだらう。何れにしても此の場所で論じ盡すには問題が餘りに大きい。唯一言すべきことは、獨立保持を目的とする場合には、國民を一致協力せしめることは容易であるが、國家の膨脹を目的とする場合には、緩急遽速に就て國民の見解は分裂するだらう。況んや國內に解決すべき社會問題を持つ場合には、常に意見の一致が困難なるのみならず、一旦國交の破裂した際に、完全なる舉國一

致が望まれまい、而して日本が未來に臨むべき危機は、正に完全なる國民の一致を必要とする時なのである。更に右翼思想の中に軍備充實の一項が重要な地位を占める限り、後に述べる社會改革は決して充分に行はれないことは覺悟せねばならない。巨大なる軍事費を計上する豫算は、到底社會施設を顧みる餘裕がないからである。社會改革の徹底を右翼思想と結合することは、凡そ不可能な事を求めるものと云はねばならない。

第五は大亞細主義である。白色人種殊にアングロサクソン人種の壓迫から、亞細亞民族を解放せんとするのである。亞細亞諸國は獨立を回復することを熱望することは確かである、然し日本の力を借りることに賛成しまい、何故なれば英米の宣傳により日本を誤解してゐる點もあらうが、日本の過去の外交史が彼等に疑惑を抱かしめるからである。英米を排して日本を代りに引込むならば、彼等は寧ろ英米の方を選ぶだらう、何故なれば日本の内部に於て同胞に對してさへ充分の自由を與へてゐないのに、その日本から外國は充分なる自由を與へられることを期待しえないからであり、又英米にはたとへ不徹底なりとも自由主義的思想が浸潤してゐる、異民族を統御するに就て彼等は日本人よりも妙諦を解してゐるからである。亞細亞の諸國

に於ける日本の信用をば、吾々は決して過超評價してはならない。若し大亞細主義が何等の領土的野心を持たないで、唯亞細亞に於て日本が外國と平等の通商貿易をなすことを目的とするならば、寧ろ大亞細主義などを唱へるよりも、直截に通商の自由を標榜した方が却て實行の可能性も多いと思ふ。要するに大亞細主義が日本の利益を圖る掩蔽の口實ならば別であるが、眞剣に亞細亞民族を解放するにあるならば、日本は先づ日本に於て所謂王道を行はねばならない。日本に返れと日本主義を唱へた人々は、此の點に於てこそ日本に返らねばならないのである。

第六は反資本主義である。財閥の横暴を責め農村の窮乏を救ひ、中小商工の保護を主張してゐる點に於て、資本主義に何等かの改革を行はんとする意圖が分る。流石に切迫した社會問題は、右翼の人を驅りて社會改革にまで至らしめた、之が從來の右翼思想に缺けてゐた點なのである。今片言隻語からして此の社會改革論の特色とみるべきものを摘出すると、第一に横暴な財閥とは云ふが、大資本家階級とは云はない、此の點に於て一二特定の財閥が政黨と關係したと云ふ疑惑から來る單なる反感に過ぎないかと云ふ疑問が起る。第二に農村の救済を力説し

て、商工等に對して農業の偏重が認められる、被告の口から「兵農一致」と云ふ言さへ出てゐる。思ふに軍人に農村出身者が多い爲に、その痛苦を感じてゐること、農業にはまだ資本主義が充分に浸透してゐないこと、農民の傳統的思想が右翼思想と共鳴すること等の爲であらう。外國に於ても保守主義者は常に農村問題にのみは熱心である。第三に農商工の中産階級の保護を主張すること、第四に労働者階級に對しては、唯失業者の續出と云ふ一句に止まり、他に何等言及してゐないことである。

以上の特色から徴すると、此の社會改革論は中産階級と農民とを主とする社會改良主義である。昔に資本主義自體を變革するのではないのみならず、所謂労働者問題は解決の緒にさへ着かないのである。資本主義の根本を維持しながら、農村のみを資本主義から防止することが可能であらうか、寧ろ往くべき道は農村を資本主義から隔離することではなくて、資本主義自體に直面することである。中産階級のすべては大資本家階級との競争により必ずしも敗北するものではない、あるものは殘存しあるものは擡頭する、然し敗北すべき中産階級は、存在の合理性に乏しいのである。之を保護する爲に資本主義の進行を不自然に抑止することは、合理主義に

矛盾することである。寧ろ労働者階級の地位を向上せしめて、中産階級に匹敵せしめるに如くはない。要するに此の改革論は復古的な社會改良主義であり、資本主義を蟬脱した改革ではなく、曾てのありし資本主義に還元せんとするものである。昔に現代社會問題が解決されないのみではない、その意圖する目的さへ水泡に歸するの外はあるまい。

それでは社會改良主義より一步を進めた改革が、右翼思想家にとつて可能であるかどうか。右翼思想が國家主義の上に立つ限りに於て、それは不可能である、何故なれば國家の爲に爲される社會改革は、又國家の爲に限界を付けられねばならないからである。國內の統一を保ち外國に對して迫力を強める必要のある時に、資本主義の根本を改革するが如きは、不測の動搖を惹起し、國內の安定と秩序とを妨げるからである。況んや軍備充實主義と大亞細亞主義とを一方に持つ以上は、之と社會改革とを併行させることは、財力が到底許さない。なるほど大戰當時各國が行つた如き計畫經濟を強行することは不可能ではあるまい。然しそれは短時日を見越した戦時の緊張の下に於てのみ可能であり、之を平常の場合に適用することは自ら別問題である、況んや計畫經濟は自由企業に對立する點に於ては反資本主義的ではあらう、然し自由企業

が資本主義のすべてではない、單に生産の無政府性を改革したからと云つて、資本主義の害悪のすべてが解消するのではない。近時統制經濟計畫經濟の聲を聞くが、問題は計畫統制か自由經濟かにあるのではない、何の爲の統制計畫かに在るのである。國家主義者の統制經濟は依然として國家主義の烙印を負うて、資本主義經濟とも社會主義經濟とも異なる弊害を醸生することなくば幸である。之を要するに右翼思想の下に社會改革の徹底は期待しえない。右翼の人々が反資本主義の旗幟を立てたるが故にとて、その××××に魅惑されるものは、唯久しからずして幻滅の悲哀を味ふに過ぎないだらう。

(七) 結 論

以上私は五・一五事件に對する感想を述べ、此事件に現はれた限りの右翼思想に對して、その理論的缺點とその内在的矛盾とを指摘した。此の事件を報道した獨逸の「ベルリーナー・ターゲブラット」紙は「今日以後の日本の政治家は、最も強固な要塞を陥落せんとする將軍の持つよりも、より以上の聰明と剛毅と運命の幸福とを必要とするだらう」と云ひ、英國の「モー

ニング・ポスト」紙は「日本國民がいかなる戦に敗れた場合にも之より以上の恥辱にはならな
いだらう」と云つた。之等の批評は事件發生の狀態を知らざる第三者の言ではあるが、それだ
け一擲の眞理がその中に含まれてないとは云へない。

私は右翼思想に反對ではあるが、右翼思想は今現に多數の民衆を支配しつゝある思想として
動かすべからざる存在である。而して由來右翼思想は理性よりも直觀に根據し、意識の世界よ
りも本能の世界に生きてゐる。その故に此の思想を理論付けることは困難ではあらうが、若し
徒に直觀と本能とに放任して置くならば、日毎に別個の理論に蠶食されるだらう、又若し反對
思想家の自由なる批判と検討とに曝さないならば、右翼思想は萎微退歩するの外はあるまい。
右翼の人々は自らの思想を組織し系統付けるべきである。而して此の思想が無意識の世界に立
て籠つてゐるだけに、平生意識の世界に於ては進歩思想を採るものが、一旦非常の際に突如と
して本能の聲に動かされることが多い。此の人々の潜在的な思想を白日の下に齎す爲にも、右翼
思想は組織され公衆の前に現はれねばならない。吾々は右翼思想を徒に保守反動の名の下に斥
けることなしに、虚心坦懐に之に傾聴すると共に、他方に於て忌憚なき批判検討を怠つてはな

らないと思ふ、かくて始めて思想の眞正の進歩がありうるのである。

昭和八年十一月號「文藝春秋」

(三) 國家社會主義の批判

(一) 緒言

最近の吾が國社會思想において注目すべきことは、ファッションと國家社會主義との擡頭である。この兩者の負擔者の間にいかなる聯關が存するかに就て、私は確實に知る所がない。従つて暫く國家社會主義のみを單獨に捉へて、その理論を批評の對象に置くこととする。その理論の代表者として赤松克麿氏を選び、同氏の小冊子「國民主義と社會主義」、昨年十一月號「日本社會主義」誌上の論文「國際社會主義における空想主義と現實主義」と、昨年十二月號「改造」誌上における論文「科學的日本主義から出發して」、本年一月號「經濟往來」誌上における座談會の記事を、私の批判の資料としよう。

同氏の國家社會主義を讀過して私は四箇の論點に分つて検討することが必要であると思ふ。

第一は暫く國家社會主義を前提として肯定し、その上に於て同氏の思想構成は果して私を首肯せしめうるか否か。第二に國家社會主義自體は果して是認しうるか否か。第三に國家社會主義を批判するマルクス主義者の立論を、私はいかに再批判すべきであるか。最後に國家社會主義は私の反對する所なるに拘らず、ある種の暗示を日本の社會思想界に投じてゐると思ふが、それは何であるかそれをいかに我々は取扱ふべきであるか等がそれである。第一と第二の論點を本文に於て述べ、第三と第四とに就ては別に稿を改めて説くこととする。

(二) 國家社會主義の内容

凡そ一切の社會思想に對して、私は三箇の問題を提起しその解答を要求する。まづ第一にその思想はいかなる哲學を持つか、第二にそれは現存資本主義の秩序といかなる交渉を持つか、第三にそれは思想實現の方法として何を提示するかといふことである。赤松氏の國家社會主義はそれが依據する哲學について全面を展開してはゐない、だが既に國家社會主義といふ以上は、社會主義と國家主義との抱合である、従つて國家主義といふ社會哲學のみは、赤松氏も論

及して居られる。次に赤松氏の資本主義に對する對案は社會主義社會である、之に就て同氏は上述の著述に於て詳論しては居られないが、既に同氏の從來の立場から當然として省略されたのであらう。而して最後に社會主義實現の方法として、氏は議會主義と言論自由主義とを採るか、或は又暴力革命主義と國家社會主義者の獨裁主義とを採るかを明示されてゐない。唯社會主義の實現方法として、國際性を否定し國民性を力説し、このことが同氏の所論の主要部分を形成してゐる。

然らば赤松氏の社會哲學としての國家主義又は國民主義とは何であるか。氏はいふ、

「マルクスからいへば、國家主義とか國民性とかいふものは反動主義である、こんなものはブルジョアジートの主義である。プロレタリアはインターナショナルである。國家と國民とを口にするものは一つの反動的ショーヴィニズムであるといふのでありますが、私はそこに非常な共產黨主義者の偏見があると思ひます」(「國民主義と社會主義」一九頁)。

進んでマルクス主義の國家觀を排斥して、國家は搾取階級が非搾取階級を壓迫して搾取を可能ならしめる強制機關ではない、従つて階級對立がなくなつても強制機關としての國家は消滅

するのではない、強制力は人類の生活を統制する権力として絶対必要であり、搾取がなければ強制がないといふことは餘りに觀念論的な考ではないかと考へられる(同一九—二三頁)。かくして強制機關としての國家の存在を是認することにより、國家主義が反動主義ではなく、進歩主義と結合せうると推論されるかの如くである。

進んで氏の國民主義を窺ふと、元來プロレタリアの國家主義とは、マルクスの「共產黨宣言」に於ける萬國の労働者よ團結せよといふ言から出たのであるが、プロレタリア國際主義は實はブルジョアの國際主義から産れたのである。アダム・スミスから始まるマンチエスター學派により叫ばれた自由貿易主義が實現されば、世界單一の經濟社會が成立し、各國民は國民意識を失ふ、と考へたのはブルジョアの學者であり、それを背景としてマルクスも亦萬國の労働者が國民意識を失つて、國際的團結が可能であると考へた。然るに前世紀の末から現代にかけてブルジョア・インターナショナルは敗れた。工業が輕工業から重工業へと推移するや、

「自由貿易主義は保護貿易主義となり、門戶開放主義(市場・資源の開放)は門戶閉鎖主義

(市場・資源の獨占)となり、國際的自由競争主義は國家的獨占主義となり、世界平和主義は武力對立主義となつた。國際的分業に基く單一的世界經濟は、自給自足的經濟の方向へ進んで來た」(「日本社會主義」十一月號六頁)。

現代に顯著なるはブルジョアの國民主義的傾向である。それと共にプロレタリアも亦國民主義的となる。

「ブルジョア・インターナショナルは破壊された。然らば萬國のプロレタリアはどんな立場に置かれたか。優勝國民のプロレタリアは高き生活水準を獲得し弱小國民のプロレタリアは低き生活水準を押しつけられた。……アメリカのプロレタリアは日本のプロレタリアの移入を拒否し、かつ既往の日本プロレタリアに對して民族的差別待遇を強要した。こゝに於て萬國のプロレタリアを貫く横斷的なる連帶意識は必然的に稀薄化せざるを得なくなつた」(同六七頁)。

「人類の歴史は階級闘争の歴史であると共に民族闘争の歴史である」、「國內的に階級と階級との生存闘争があると共に、國際的に國民と國民との生存闘争があることは、世界歴史が我々に呈示する眼前の事實だ」(「改造」十二月號七四頁)。

以上の如き現實の認識からそして恐らくその現實を正當と是認して、氏の議論は社會主義實現の方法に接続する。世界のプロレタリアは國民的なるが故に、自己の生活水準を引上げてまで、他國のプロレタリアを援助する筈がない。のみならず一國に社會主義が實現されようとも、その社會主義國と他の社會主義國とは、依然として自己の生活水準を維持せんがために闘争する。社會主義の實現した曉は、世界に平和が來ると思ふは、共產主義者の夢である。國民對國民の生存闘争が圓滿に解決された曉に於てのみ、始めて世界平和の曙光が見えてくる。それまでの間吾々は社會主義を世界的に實現することを夢みずして一國內の實現のみを圖るべきである。然らばいかにして一國內にそれを實現するか。外國のプロレタリアは國民的なるが故に、その援助に依存すべきではない、一國無産階級の戦闘力にのみ依存すべきである、モスコの命令を至上命令と奉戴するは、愚劣千萬である。更に各國プロレタリアは「自己の生存權の確保を第一義として世界政策を決定するのだ。」このことは一國プロレタリアの水準を引上げるためには、他國を侵略するも可なりといふ結論に至るか。氏はそれを明白には云はないが、然し恐らく氏の論理的歸結がそこに到達するであらうことは、前後の文意よりして觀取し

えられると思ふ。

(三) 國家社會主義の内在的批判

以上は私の把握した赤松氏の國家社會主義の要約である。之に對して先づ第一に、私は暫く氏の國家社會主義を正當と前提して、氏の思想構成の過程が論理的なりや否やを検討しよう。氏が國家主義を説く場合に、マルクスの國家觀に反對して、強制權力の機關としての國家が必要だといふ意見は、私も同感である。然し強制機關としての國家の存在を是認することと、國家主義を合理的だといふことは、全く別箇の問題でなければならぬ。凡そ國家といふ單一の言により二つのことが意味される。一は命令強制機關であり、他はかゝる機關により統一される多數人間の集團である。而して國家主義といふ場合の國家とは後者を意味し、かゝる集團を根元的の價值あるものとし、これに對して個人を以て派生的の價值しかないといふことに、國家主義といふ社會哲學の本質が存するのである。従つて強制機關としての國家を是認したとて、それが直に集團としての國家を根元的の價值あるものだといふ立證にはならない。氏はこ

の點に於て國家の語義を混同して、國家主義の正當性を説くに、論理の飛躍を犯してゐる。

次に國民主義に轉ずるならば、氏は國民主義と國家主義とを同視して居られるが、國民と國家とは必ずしも同一ではない、一國家が數國民を抱合することあると共に一國民が數國家を構成することもある。然し此點は暫く氏が國民を國家と同視する新用語例を開いたと假定する。現代のブルジョアもプロレタリアも國民主義的であるといふ事實の認識に於て、私は氏と同意見である。然し氏の國民主義の擡頭過程の説明に於て、資本主義が輕工業より重工業へ推移したことに、ブルジョアの國民主義の成立が理由づけられ、労働の移住の不自由性にプロレタリアの國民主義の成立が歸せられるに就ては私に異論がある。氏のこの點の説明は三箇の誤謬を包含する。第一に氏は國民主義なるイデオロギーを全面的に把握して居られない。國民主義とは一國民は言語、風俗、感情、歴史、文化等に於て特異の様相を有するが故に、消極的には他の國民と獨立に扱はれることを要求し、積極的には他の國民に對して擴張普及せんことを意圖する思想である。氏の國民主義とは單に經濟生活に於て現はれた國民主義であり、之を以て國民主義の全體とするは、一部を以て全部とする錯誤であり、否寧ろかゝる經濟的國民主義

こそは、國民主義の表現であり結果である。第二に氏の敘述は歴史的事實に反する。氏は國民主義は前世紀の末から擡頭した思想と見られるが、國民主義運動は希臘の獨立、白耳義の獨立、伊太利の獨立、獨逸の獨立等となつて、既に氏のいはゆるブルジョア・インターナショナルの全盛時代なる前世紀の中葉に於て現はれてゐるのである。この歴史的誤謬は一は氏が國民主義を單に經濟的のみにみ解したことに原因する。第三に氏は國民主義の擡頭を、輕工業より重工業への資本主義の轉化に原因せしめる。かゝる説明は意識的にか無意識的にか、唯物史觀の立場に立脚する。氏が多くの點に於て共產主義者と對立するに拘はらず、根本の哲學に於て氏は果して唯物辯證法をとられるのであらうか。寧ろ世界の國民主義的傾向は、始めより根帯強固なるものがあつて、たとへ經濟組織が世界的にならうとも、經濟關係に左右されざる獨自のものとして殘されてゐるのである。それを經濟關係により精算されるものと考へた所に、ブルジョア・イデオロギーの代辯人としてのベンサムの快樂主義的人間觀の誤謬があり、プロレタリア・イデオロギーの代辯人としてのマルクスの唯物辯證法の誤謬があつたのである。赤松氏は自ら知らずしてマルクスの哲學の上に立たれたならば、須らくそれを清算すべきであ

つた。それから脱却しない限り、プロレタリア・インターナショナルもまた必然に決定されたイデオロギーとして是認せねばならない羽目に陥り、赤松氏はそれを誤謬なりと排撃しえざる自繩自縛の窮境に立たざるをえないであらう。

以上の誤謬の外にまだ一つ問題は残る。世界のプロレタリアに國民主義的傾向の存在するとは事實である。然しかゝる事實の存在を認識することは、必ずしも國民主義を正當として是認することの根據とはなりえない。事實としての國民主義は或はこれを排撃せねばならないかも知れないからである。いふまでもなく前者は「事實の問題」であつて「権利の問題」ではなく、事實はそのまゝに價値の判断とはなり得ない。氏は國民主義を是認する限りに於て、事實としての國民主義の存在を説く以外に、別に國民主義を合理的なりとする論據を提示せねばならない。それを缺くことは社會科學的認識と社會政策的認識とを混同するものと斷せねばならない。

國家主義國民主義に就て之だけのことが云はれた後に於て、更に附加せねばならないのは、氏が果して自己の社會主義を抱合せしめんとする國家主義國民主義の實體を、餘蘊なく究明し

盡したか否かといふ問題である。國家國民主義とは社會哲學の發展史上に於て、果していかなる段階にあるのか、國家や國民の名に於て叫ばれることは、果して國家國民の全成員を考慮の中に算へてゐるのか。赤松氏が今や貴重なる社會主義を提げて、結合を圖らんとする國家主義國民主義は、社會主義の實現を促進する原動力たり得るか、社會主義はその結合により自らを消失する幻滅の悲境に立たないと斷言し得るか。多くのことを賭せんとする國家國民主義の實體こそは、氏が全力を傾倒して究明すべきことであつた、而も吾々は多くを氏から聞くを得ない。こゝに氏の國家社會主義の最大の遺漏があることは後述するが如くである。

轉じて社會主義實現方法としての國民主義に及ぶ。氏の國民主義からはいふ、各國プロレタリアは國民主義的である、自己を犠牲として他國のプロレタリアを援助しない、故に自國のプロレタリアによつてのみ社會主義を實現すべきだと。この結論に私は異論はない、然し他國のプロレタリアの援助は、必ずしも自己を犠牲とするを必要としない。米國のプロレタリアは日本のブルジョアへの侵出を恐れるが故に、日本のプロレタリアのブルジョアへの闘争を援助しないとは限らない、この場合に何故外國のプロレタリアの援助を排斥せねばならないかは、

氏の説明だけでは充分ではない。氏は他國の援助に大して信頼が出来ないといふことには成功する、だが信頼が出来なくても排斥せねばならないといふ説明がない。氏の國民主義は更に一步進めて、一國プロレタリアは生存權確保を第一義とすると云ふ立場から、他國への侵略を是認する如くである、然し現時に於てプロレタリアの生存權の確保から、他國への侵略が企圖されるであらうか、又他國への侵略は結果に於てプロレタリアの生存權の確保に役立つであらうか。なるほど市場の擴張は、ブルジョアリーの利潤を増加する、その限りに於てプロレタリアの條件が向上しうる可能性は増加するであらう、然し之だけのことならばプロレタリアがブルジョアリーの利益の殘滓に浴しうるといふことであつて、社會主義の實現が促進されることではない。侵略主義としての國民主義と抱合することにより社會主義は何のうる所なくして止まるの外はない。更に氏によれば、各國に社會主義は實現されても國民間の生存闘争は絶えない、世界平和は直に來らずしてその闘争の圓滿に解決された後にのみ來る、一國民が他國民の犠牲となることは「安價なる人道主義」である。若し果して「安價なる人道主義」に信頼が出来ないなら、國民間の生存闘争は永久に持續し、闘争の解決される時機があらうとは思はれない。そ

れなら氏によれば結局世界平和は永久に到來せずして、世界は常住不斷の修羅の巷でなければならぬ。而も氏は社會主義はまづ第一段階に國民的に實現し第二段階に於て世界的に實現すると云ふ。國民的より世界的への推移は、「安價なる人道主義」に信頼するか、抑も又國民的闘争の激化によるのであるか。後者によることは世界平和を夢と化することであり、前者によることは國民主義の自己破綻でなければならぬ。この矛盾を氏はいかにして脱却せんとするか。

最後に氏の國家社會主義は、社會主義實現方法として革命か議會かに就て一言も觸れてゐない。氏は多年の社會民主主義を奉じて、依然として議會主義を維持されるのか、抑も又急轉回して暴力革命主義を採らんとするか。若し國家社會主義の提唱が、單に國民主義と社會主義との結合にのみあるならば、さまで事新しき轉化ではない。國民主義との結合は當然に革命主義への轉化を包含してゐるのではあるまいか、而も氏はそれを暗黙の裡に隠蔽してゐるのであらう。若し果して然らば、それを明白に表現して氏の轉向を理論的に説明せざる所に、氏の立論の不充分さがある。

以上は氏の國家社會主義を一應の前提として、氏の思想構成の内部的批判であるが、私は次に國家社會主義自體を正面から批判的としなければならぬ。

(四) 國家主義と社會主義

一つの思想を批判するためには、當然に批判の基準を前提として豫定せねばならない。今や赤松氏の國家社會主義の批判の場合にも、私の基準と目するものを説明せねばならない譯であるが、幸にして赤松氏と私との間には共通の一點がある。それは我々は共に社會主義者だといふことである。赤松氏に於て國家主義と社會主義と、いづれに主點があるかは人により意見が分れるであらう、然し私は同氏の文章に現はれた限りに於ては、氏は社會主義に主點を置き、その實現の方法として國家主義との抱合を企てるものと解釋する。こゝに於て私の批判は次の一點に歸着する、國家社會主義は社會主義に對して果して忠實なるや否や。

國家主義とは國家と稱する個人の集團の維持と發展とに第一義的價值を置き、個人各個はその手段として派生的の價值あるものと見る思想であり、これと對稱的地位にあるものが個人

主義である。個人主義にも快樂主義的個人主義と理想主義的のそれとがある、然し國家主義はそのいづれもの個人主義と正面に對立する。國民主義とは一國民の內的及び外的生活に第一義的の價值を置き、他の國民の生活に對し同等又はそれ以下の價值を置かんとするものである。それは消極的には自國民の文化又は主權の獨立性を擁護することに現はれ、積極的には他國民の文化又は主權への侵略を是認することに現はれる。之と對立するものが國際主義であり、他國民の文化の前に自國文化の獨自性を輕視し他國の主權を尊重して之を侵害せざらんことを努力する。暫く國家と國民とを同視するならば、國家主義と國民主義とは同一事象の異なる様相の名稱である。國家主義は主として國內に於て個人と對立し、國民主義は主として國際關係に於て外國に對立するものである。吾々の問題は、かく解釋された國家主義と國民主義とは、その本來の性質に於て、果して社會主義と結合し得るものなるや否やにある。

命令強制の機關としての國家は支配階級の被支配階級への搾取を可能ならしめる機關だとマルクス主義はいふ。之に反して國家は階級對立の上に超越して、いづれの階級の利害にも偏せざる機關であると一部の國家論はいふ。前者は階級國家觀であり後者は文化國家觀である。之

に關する赤松氏の所論は明白ではないが、この兩種の國家觀はいづれも一面の眞理を有すると共に、他面の眞理を看過することに於て誤謬がある。國家はある場合に於て階級的である、例へば私有財産制度に關係する限りに於て殊にこの傾向が顯著である。然し他の場合に於て超階級的の一面を持つ、それは教育、衛生、交通、防火等に關する警察權を顧みれば首肯されるだらう。若し命令強制機關としての國家を階級國家と見るならば、かゝる機關により統一される集團としての國家もまた、必然に階級的たらざるをえないものとなり、國家主義は支配階級への阿附思想となるであらう。然し命令強制機關としての國家に超階級的の一面を認める吾々は、集團としての國家が必然には支配階級の利益により左右されるものとは認めない、従つて國家を第一義的價值ありとする國家主義が必ずしも反動的傾向を持つものとは斷言しない。前世紀における英國保守黨に屬するヤング・イングランド黨は率先して労働立法運動に参加し、獨逸のビスマルクが社會保險法の制定に貢獻したるが如き、更に遡れば十八世紀に於ける開明專制君主又は政治家の治績が、必ずしも權力階級の利益にのみ加擔したのでない一面は、國家主義の非反動的性質を物語るものといふべきである。

だが然し以上のことは國家主義が反動的傾向を持つといふ必然性を否定するだけで、國家主義が社會主義と結合し得るや否やといふ問題を論ずるに當りては、國家主義の到達すべき蓋然性を検討せねばならない。而してこの觀點に立つ時に國家主義は次の三點において、社會主義と抱合しえない危険性を包含する。

まづ第一に國家主義と國民主義とは同じく、人間の感情に根柢を有することを本質とする。こゝにこの思想が他の思想の持たざる強みがあると共に、他の思想列に置きえない特異の色彩がある。既に感情に根柢を持つが故に、この思想が終局の頼みとする所は、從來の傳統と因襲とに執着する人間性である。人間にかゝる傾向の絶えざる間は、國家主義は容易に跡を絶つまい。然しこの思想は理智により論理により組織されざることの故に、神祕の境に自己を隠蔽して、批判と吟味とを排斥する。かゝる實體の不明なる思想に、社會主義を結合せんとすることは、策として危険の道程に己れを驅り立てるものなるのみならず、國家主義はその本質に於て一切の改革的思想から清算されねばならないものである、なぜなれば感情に根柢を有し因襲と傳統とに依存する思想は、その實體を窮追するならば、凡そ改革的思想と相容るべからざるも

のだからである。一時の權變として國家主義を利用せんとするならば別として、苟くも眞摯に社會の改革を圖らんとするものは、國家主義を利用すべきに非ずして、民衆をしてそれへの清算に路を進ましむべきである。

次に國家主義は國家を以て第一義的の價值あるものとする、従つて國家は批判の對象とならずして批判の出所となり淵源となる。ヘーゲルが「法律哲學」にいふが如く、國家が道徳的理念の實現であるならば、國家の行爲はすべて是認せらるべくして、それを批判することは冒瀆であり不道徳でなければならぬ、なぜならばそれを批判することは、國家以上の價值あるもの存在を豫定するからである。國家にかゝる無批判的の尊嚴性を與へ、神聖不可侵の地位を占めさせることは、我々の道徳心を枯死せしめるのみならず、國家の行爲は結局個人又は個人の集合の行爲であり、個人又はその集合の行爲が批判の對象となるならば、國家の行爲もまた當然に吾々により批判されねばならないものである、然るに國家の行爲といふ不可思議なる別種のものが存在するかの如く考へることは、現實の國家行爲の構成される過程を無視することである。若し國家を以て批判を許さざる神聖のものとするならば、國家主義より來る論理的歸結

は國家をあるがまゝに放任するといふ宿命論に陥り、結局は現状の維持に終る保守主義である。國家主義が現存秩序の維持に終らんとするに拘らず、社會主義は私有財産を××せよと云ふ最も急進的の改革思想である。國家主義者は國家の尊嚴に加ふる所あらしめんがために、暫く現状の改革を妥協するかも知れない、然し國家主義は早晚その本質よりして一定の停止點に到來せねばならない、その時社會主義者がその改革の不徹底性を咎めるならば、國家の神聖に容喙するものとして叱責されねばならぬだらう。凡そ國家主義と社會主義とは到底相調和し得ざる異種物である。

更に國家主義は國家なる集團を直接の對象となし、國家を構成する個人をば單に間接の對象とするに過ぎない。而して國家の何を對象とするかと云へば、文化の如き內的の條件をとらずして、經濟力の發展とか領土の膨脹とか軍備の充實とかの外部的條件に重要性を置き易い。國家主義とは集團の外部的條件を第一義的價值あるものとする所に本質がある。國家は個人の集團であるから、國家を對象とすることは、當然にそれを構成する個人の全體に關心せねばならないに拘らず、國家とは個人を離れた抽象的一體と考へられ、それに必要ある限りに於ての

み個人の運命は考慮に置かれるに止まるのである。のみならず國家の外部的條件に囚はれる結果は、更に一層この傾向を助長し易い。これ等の條件は必要なものではある、然し本來は個人の人格の成長に對する條件として、相對的價值しか持たないものである。然るに之に絶對的價值を與へることは、いよ／＼個人の運命と隔離せしめるに至る。なるほど國家主義は必ずしも個人の成長に無關心ではない、然し労働者が國家主義から關心されるのは、それが國家の統一と平和とを圖るに必要だからであり、生産力の發展に必要だからであり、國軍の衛生保健のためだからであり、労働者自體を直接の目的とするのではない、労働者の運命は國家の爲と云ふ目的より來る反射的利益を享受するに過ぎない、かゝる反射利益は早晚限界點に到達して、それ以上は無視されるに相違ないのである。同じ社會政策的施設でありながら、獨逸の如き國家主義國と、英國の如き個人主義國とを比較せば、この事は直に理解されうる。況んや社會主義の實現の如きは、それを實行せざることが、國家の存立を危殆に驅るが如き急迫の事情になり限り、國家主義により是認される筈がない。もし眞に労働者の運命を改革せんと欲するならば、國家主義と結合を圖るべきではなくて、國家主義的思想をまづ崩壞に導いて、個人の運命

を前景にもたらず思想の擡頭を助けねばならない。それこそが社會主義への路を開く第一歩である。國家主義と社會主義とは唯結合しうるが如き外觀を呈するに過ぎない、それは本來の姿に於ては、互に分離すべき敵對思想である、之を結合せんとするは吳と越とを同舟せしめんとする愚策である。

國家主義と社會主義とはかゝる反撥性を有する。然らば國民主義と社會主義とはどうであらうか。

(五) 國民主義と社會主義

社會主義と國民主義との結合を考察するに當つては、國民主義をさきに述べた様に消極積極の両面に分つ必要がある。國民主義の消極的主張は、一國民の文化及び主權の獨自性を保持せんとするにある。この意味の國民主義に對立するものは、徒らに外國の文化を讚美し渴仰して、自國文化の特殊性を無視せんとするもの、又は他國の要求の前に自國の主權を讓歩せんとするものである。今日後者の如き意見を有するものは多くはあるまい。然し吾が國を以て北米合衆

國の一州たらしめ、勞農露西亞の一部たらしめるも可なりといふものが絶無ではない。もしも
れ後者の如き意見を有するものは決して少くない。然し私共は消極的主張である限りに於て國
民主義に賛成せねばならない。

一國民はその言語、風俗、感情、歴史、文化等に於て他國民と異なるものを有する。國際交通
頻繁なる今日に於て、各國民の生活要素が接近しつゝあることは勿論であるが、而も尙國民獨
自の要素は決して消滅することはない。他國の優越せるものを吸収することを少しも排斥
するのではないと共に、自國の獨自のものへの評價を忘却することは、その國民全體の人格の成
長を助ける所以ではない。而して他國の主權が我々を支配することは、恐らくは、自國の獨自
の生活要素を蹂躪する危険性を持つ。かくて我々は自國の主權と文化との獨立性のためには、
財を棄て生命をなげうつとも之を擁護する必要がある。この意味に於て吾々は愛國者でなけれ
ばならない、又この意味の國民主義者でなければならない。吾が國民の缺點は、凡そ國民主義
ならばその一切を是認するか、又は凡そ國民主義ならばその一切を否認して、この意味の國民
主義を眞に把握し體得せざるにある。

こゝに於て問題は、この意味の國民主義と社會主義との關係如何にある。兩者が關係する第
一の場合は、他國が一國の社會主義運動に對して抑壓的の干渉を試みることである。目下の事
情に於て吾が國と外國との間にかゝる關係が発生するとは考へられないが、萬一社會主義運動
の進展がある程度に達した時に、資本家階級が窮餘の策として他國の援助を求めることがない
とはいへない。この場合は一國主權の獨立性を主張する國民主義の立場よりして、斷じてかゝ
る容喙を排撃せねばならない。今日國民主義を口にする一部の人が、この場合に外國の援助
に依頼するが如き矛盾を犯さないとは限るまい、然し若しそれ等の人が眞正に國民主義をとる
ならば、この矛盾を犯してはならない筈である。第二の場合は他の社會主義國（例へば露西亞
の如き）又は他國の社會主義團體が、一國の社會主義を援助することである。この場合は更に
分れて二つとなる、即ち一は一國の社會主義の内容に關して、他國が強制的の容喙をする場合
である。例へば社會主義と國體との關係に就て、或は社會主義實現の方法として議會か革命か
に就て、各國を通じて一律の行徑をとるべきことを要求するが如き之である。この點に關して
第二インターナショナルと第三インターナショナルとの間に對立が生ずる譯であるが、各國國

民の物質的方面は資本主義なる國際的共通性を有するとも、各國は所與の自然的條件に於て同一でないのみならず、各國の文化は決して一律ではない。等しく社會主義をとりながら、その内容が何であるかは各國の異なる條件に適應して異らねばならない。赤松氏が社會主義の國民性を唱ふる時に、この點に關する限りは正當である。各國民の生活要素は現に國民的である、又國民的たる事が國民成長の爲に必要である。然らば國民生活の一部としての社會主義も亦、他の生活要素と適應した形態をとることが、國民成長の爲に必要でなければならぬ。今一つの場合は外國が一國の社會主義の獨自性を認めながら、その運動に對して援助する場合である。赤松氏は各國プロレタリアは國民的なるが故に、かゝる援助は起らないと斷言されるかの如くであるが、私は必ずしもさうではないと思ふ。若しかゝる援助があつた場合に必ずしもそれを排斥する必要はない。その援助は一國の主權を侵害するのでもなければ、又一國民の獨自の文化を阻止するのでもない。之を甘受することは毫も國民主義の本質を傷つけるものではない。唯現實の問題としては、かゝる援助と外國の援助に對する國民一部の反感とが、比較考量していづれが社會主義運動の爲に得策であるかにある。日本の如き國に於ては援助を受けない方が

得策であらう、何となれば善かれ悪かれこの國民の排外心は盲目的に強烈だからである。然し之は利害打算から來る賢愚の問題であつて、何れを採るべきかといふ主義と原理との問題ではない。

進んで國民主義の積極的方面に及ぶ。この方面に於て國民主義は他國の主權又は文化の獨立性を侵害する形態をとる。前述の國民主義が消極的であるに反して、この意味の國民主義は攻撃的であり積極的である。赤松氏は明白にはないが、暗黙の裡にこの國民主義を是認されるかの如くである。なるほど各國が現にこの意味に於て國民主義的であり、プロレタリアでも尙國民主義的であり、階級闘争と共に民族闘争が我々の眼前に現はれる事實たることに疑ひはない。然しこの事實を事實として承認すること、この事實に反對し別箇の方面へ誘導する必要がないといふことは同一ではない。積極的の國民主義はそれ自身に於て普遍妥當の原理たり得ない。若し一國民が自國の利益を第一義に考へることが正當であるならば、他國民も亦自國の利益に就て同様のことが考へられねばならない。恰も利己主義が普遍妥當の原理たり得ないと同じく、この意味の國民主義も亦、何國民にも妥當し何國民も亦その原理に服せざるべ

からざる原理たり得ない。既にそれ自身に於て普遍妥當的の原理たり得ず、又それ以上の原理を認めないとすれば、一國民の利益と他國民の利益との衝突は、武力を以て解決するの外はない。武力の劣れるものは弱きが故に一時屈するかも知れない、然しそれは彼等が納得し得心したるが故に屈したのでないが爲に、彼等の道徳感はずや復讐を忘れさせまい。ひそかに他日の武力の準備を企圖する、かくして世界は永久に修羅の巷と化して平和と秩序とは地を拂ふだらう。かゝる状態は國民を化して不斷の軍人たらしめることであつて、人としての成長の如きは措いて顧られない。侵略的の國民主義は斷じてとるべからざるものである。人は或は云ふかも知れない、現在の國家間の境界が既に正義に合しない不合理のものである、之を改廢することこそが正義であると。なるほど我々も亦現時の國境が何等合理的根據を持つものでないことを承認する、豊富なる資源を獨占する國民あると共に、貧弱なる自然に踞する國民があることは、一國民内におけるブルジョアジーとプロレタリアートとの對立に比すべき、止揚さるべき對立である。然し問題は、如何にしてこの不正を除去すべきかにある、之を戰爭に訴へて除去せんとするは、侵略主義の主張である。然し國際間の不正を訴へる前に、まづ内に顧み

て國民の中に不正がないと云へるか。國際的に公正を要求するものが、その國民の利益が一部少数の特權階級により獨占されてゐるならば、國民の名に於て國際的公正を求め資格はない。而して外國をして納得せしめる所以でもない。まづ着手さるべき改革は、國內に於て社會×××××するにある、而してその進行と共にその完成に應じて、國際間の正義を不斷に絶叫するにある。

だが之だけではまだ侵略的の國民主義と社會主義との結合に論じ及んではゐない。私の考へでは、國民主義と社會主義とは、斷じて結合しえざる反撥性を有する。第一に國民主義的心理と社會主義とは正反對の立場に位する。國民主義は前述した國家主義と同じく、國民なる集團を捉へてこれを他の國民と對立せしめる。而も國民の領土的經濟的軍事的の膨脹發展が考へられる。他國民と對立せしめられた場合に於て、國民は唯その抽象的概念としてののみ考へられ、國民を構成する個としての人間が没却され易い。國民の領土軍事經濟等の發展を考へさせられる時に、之等の發展それ自身が價值あるものたるかの如くに思はれ、それはより價值あるもの（人格）の發展の條件たるを忘却せしめ易い。而して個としての人間と人格價值とが没却

される所に、決して社會主義は成長するものではない。社會主義の系統の異なるにより、ある社會主義者はかゝるものが社會主義の爲に不必要であると考へるかも知れない。なるほど社會主義自體も條件たる物質的環境を改善せんとするものではある、然し社會主義が物質的條件を改善せんとする場合にもそれは暗々裡に個としての人間の人格の尊重を前提とする。社會主義は必然の前提として、個人主義人格主義の普及を必要とする。國民主義は社會主義と結合しえざるのみではない、東と西とに背馳する對蹠物である。

次に國民主義は他國への侵略の爲と、他國よりの復讐に備へる爲、不斷に國內の統一を重要視せねばならない。統一の前にはあらゆるものが犠牲とされる、外よりの脅威の前に國內の階級對立に眼を塞がしめるのみならず、對立自身が解消するの餘儀なきに至るであらう。其故にこそ保守主義者は國內の動搖を阻止する爲に、往々にして外國と事を構へて國民の視點を他に轉ぜしめんとするのである。凡そ國民の統一といふ觀念ほど、現状維持に便宜なる合言葉はない。改革的思想を抱くものは、現状を放任しようとするこの種の魅惑に對して、不斷の警戒と監視とを怠つてはならない。のみならず他國への侵略と他國の復讐への防備とは、軍備

の充實擴張を必要とさせ、財政における軍事費を巨額ならしめる。かうして労働者の地位を改善する設備を講ずる餘地が少くなる。社會改革家が昔から、平和と軍備縮小と經費節約とを唱へるは決して偶然ではない。侵略的國民主義と社會主義とは、遂に相容るべからざる矛盾である。

最後に赤松氏の社會主義實現方法はどうか。氏は明白には云はれないが、私の推量によれば×××主義と國家社會主義者の獨裁主義とを唱へるのではあるまいか。既に國家主義と侵略的國民主義とに立つ限り、歸結はこゝに到達し易い。國家主義と國民主義とは、團體主義であり能率主義であり結果主義であり權力主義であり威壓主義である。而して之等の何れもが言論の自由を認めることと、多數の合意により共同の問題を處理することとは衝突をする。國家主義國民主義の思想の強固なる國に於て、即ちそれらの思想が一旦他の思想により解消される暇なかりし國に於て、議會主義と言論自由主義とは根柢を据ゑ難い。吾が國に於て社會主義が共產主義としてのみ發達するのこゝに原因がある。しかして同一の原因が赤松氏をして多年の社會民主主義を放棄せしめるに至つた。革命主義と獨裁主義との非に就ては、私は今は説かな

い。拙著「社會政策原理」第四章第三節を参照せられたい。××獨裁主義が勢力を獲得し得るは、その國に國家主義國民主義が牢乎たる勢力を持つからである。而して社會主義が國家主義國民主義と反撥するに拘らず、社會主義の敵たる國家國民主義を清算するに急がずして、その潮に乗じて革命主義獨裁主義を唱道するは、社會主義の眞實の成長を圖る所以ではないのである。之を洞察することなしに、社會主義者は××獨裁主義を振りかざすことにより、自ら知らずして國家國民主義の生命を延長せしめ、ファッシズムの擡頭を助長せしめつゝあるは、まことに思想界の奇怪なる悲劇である。

(六) 總括的批判

さて赤松氏の國家社會主義の總括的批判を試みよう。日本國民には國家主義と國民主義とは牢乎不拔の根柢を持つ。明治維新以來の内外の事情は、それを清算せしめなかつたのみでなく、それを助長するに與つた。この點に於て革命前の露西亞とや、近似し、大戰前の獨逸と大いに類似する。英米佛の如き國に於て、自由主義の思想により崩壞の途上にあつた思想は、吾

が國に於て今も尙國民の多數を支配してゐる。それが何故であるかに就て、私は續稿に於て詳説するつもりであるが、要するにこの事實を吾々は認識する賢明さを持たねばならないと思ふ。之を打算の外に置くことは社會改革者の怠慢である。

だがこの事實を認識する必要あることは、この事實に對していかなる批判をするかといふことと同じではない。この事實を認識するならば、この國に於て國家國民主義に抗爭することが至難なることを感ぜしめるだらう、革命獨裁主義を克服することは、鐵壁に當るが如き思ひがするであらう。このことが往々にして人を驅つて現存する潮流に妥協せしめんとする。而して社會主義に熱心なるものが、捷徑として國家國民主義の潮に乗ぜんとする魅惑がこれから發生する。彼等は必ずしも社會主義に悪意あるのではあるまい、却て熱心なるの餘りに、この權道によらんとするのである。然しそれは効果を急いで才人に溺れるものである、人間往々にしてかゝる分岐點に立ち去就に迷ふことが多い、社會改革者の心すべきはこの場合に進退を過たないことであると思ふ。

吾々は國家國民主義と社會主義とが、その本質に於て結合し得るや否やを洞察する見識を持

たねばならない。若し如上の私の説明にして過誤なくば、兩者は遂に調和しえざる異質物である。キップリング嘗て東洋と西洋との差異を歌つて、『東は東、西は西、二者は永久に相逢ふことなかるべし』と。國家主義と社會主義とは永く相逢ふことなかるべき對立物である。然し常正に現はれた場合に兩者が對立することは夙に觀破されうるに拘らず、しばしば異なる二物が一應相容れるが如き外觀を呈することがないではない、今や國家國民主義と社會主義とは共に自由主義なる思想を中間に挿んで敵對關係にある、このことが兩者の類似性を思はしめる錯覺の原因である。だがあることに反對する二物は、必ずしも相互に調和するものではない。社會主義を國家主義國民主義と結合せんとする試みは、社會主義と反對なる思想の勢力を強め、我れと我が身の墓穴を掘らんとするものである。國家主義より利用された揚句に、必要の消えた後に放棄される運命にある。

赤松氏の現實への尊重は、やゝもすれば氏をして現實との闘争を忘却せしめる。各國民は國民主義的なるが故に、民族闘争は必然である、世界の平和は安價なる人道主義であると氏は云ふ。なるほど人道主義に抗争する人間の現實の欲求は強烈である。然し科學者はこの事實を認

248011

識するに止まらうとも、改革者は現實の欲求と抗争して、いはゆる安價なる人道主義の擡頭を促成せねばなるまい。若し人道主義を安價として没却するならば、凡そ現實の欲求を是認するに止まつて、その結果は階級闘争さへも不可能にし、社會主義さへ實現を夢と化する、なぜなれば個人的欲求と階級の欲求とは決して同一ではない、階級闘争を成立せしめるには、個人の欲求を克服して階級に奉仕する『安價な人道主義』の昂揚にまたねばならないからである。

要するに赤松氏は社會運動界における共產主義との對立に急なるの餘り、自ら知らざる裡に國家國民主義との結合に、己を驅り立てたのではないか。なるほど共產主義は色々の點に於て、吾が國民心理に合する要素を含む。之と抗争することは困難であらう。然るにも拘らずそれとの抗争の道を、國家國民主義との結合に求むべきではない。依然として唯物辨證法哲學と革命獨裁主義との批判を繼續することにあらねばならない。赤松氏の企圖は或は一時の權變として、共產主義との抗争を容易ならしめるかも知れない、然しその高價なる代價として、日本の社會改革の途を延期せしめることとなる。吾々は自己の主義の勝利を助けるがために、社會の進化を逆行せしめる方面をとるべきではない。嘗ての操守を保持することは、小さき主義の

敗北に終らうとも、日本の改革を正常に向はしめるといふより大なる主義の勝利をうたふことが出来るのである。かくて赤松氏は依然として舊道を歩むべきであつた。

× × × × ×

以上の批判に於て、私は赤松氏の著述に基いて公正であつた積りである。然し侵略的國民主義と××獨裁主義とに就ては氏は明言された譯ではないから、もし氏にして明白に否定されるならば、私はその限りに於て撤回するであらう、而も大いなる喜びを以て。

國家社會主義に關しては、數名のマルクス主義者は既に批判を公にした、之を私が再批判することは、以上の批判を反面から補充する効果がある。又國家社會主義には日本の現實に即した一箇の着眼がある、之から何を我々は攝取すべきかは殘された興味ある問題である、この二つに就て、改めて別稿に於て説明を企てよう。

昭和七年一月一日乃至一月廿五日「帝國大學新聞」

(四) 國家社會主義擡頭の由來

(一) 緒言

赤松克麿氏により提唱された國家社會主義は、理論上多くの弱點を有するに拘らず、日本の社會運動に相當の勢力を揮ふであらうと私は思ふ。それを好むと好まざるとを問はず、その重要性だけは打算のうちに置かねばならない。では何故に國家社會主義にかゝる牽引性があるか、之を明かにする一つの方法は、その擡頭の由來を明かにするにある。

之に先だちて私は國家社會主義が、現今日本の社會思想界に於て、いかなる特異性を持つかを一瞥する必要がある。それは國家主義と社會主義との結合であり、その正面に對立するものが二つある、一は資本主義のイデオロギーとしての自由主義であり、一はマルクス主義である。國家社會主義が自由主義と對立する點は三つある、第一は自由主義の擁護する私有財産制

度と自由競争制度とに反対し、第二に自由主義が基礎とする個人主義の社會哲學に反対し、第三に自由主義の政治上に現はれた議會主義に反対する。それがマルクス主義に對立する點は二つある。第一はマルクス主義の階級國家觀説に反対し、第二にマルクス主義の國際主義に反対する。若しそれ筆者の立つ理想主義的社會民主主義との對立點を求めれば、第一にそれは國家至上主義をとることに於て私共の理想主義的個人主義に反対し、第二に侵略主義をとることに於て私共の平和主義に反対し、第三に××××主義と獨裁主義をとることに於て私共の言論自由主義と議會主義とに反対する。

吾が思想界の分野に於て、かゝる特異性を有する國家社會主義は、その成生の跡を尋ねれば、國家主義が反資本主義の色彩を明かにすることにより社會主義に近接し、社會主義がマルクス主義より離脱したことにより國家主義に歩みより、かくして兩者の結合が可能にされた。この結合の割合よりみれば國家主義が主にして社會主義が従であり、そこに私共が國家社會主義に反対する根拠があり、又そこにこの思想が日本に於て勢力を持つ理由があるのである。

(二) 日本に於ける國家主義

然らば國家社會主義は、何故に日本の大衆を牽引する魅力を持つか、それは國家主義が日本人の間に確乎不拔の傳統的勢力を所有するからである。ある國に於て國家主義が主要潮流となるか否かはその國の對外關係に左右されることが多い。今日本の明治以來の對外關係を回顧するに、凡そ三期の段階を區劃することが出来ると思ふ。

第一期は日本が外國からの不平等の待遇を排除せんとした時代である。日本の獨立に對する外國の脅威は、明治の初期において絶無ではなかつた、その後には治外法權の撤廢と關稅自主權の確立とは、日本を外國と對等の地位に置く表徴として、當時の全日本の進路の標的であつた。この時代は大體明治二十年代の初期まで繼續するが、明治四十一年の條約改正は、時代に於ては第二期に屬するが、第一期の時代の要望の結果をつけたものとみるべきである。

第二期は前期に於て日本が獨立を確保はしたものの、日本の隣接國に對する外國の侵略に對抗して、間接に日本の獨立を確實化せしめんとした時代である。之が明治二十年代から三十年

代を通じた時代であり、朝鮮を對象として始めは支那と、後には露西亞と對立し、日清日露の兩戰役に於てその目的を達したのである。

この兩戰役は結果において日本の産業の發展を促進したことは顯著であるが、一部の學者の云ふが如く日本の帝國主義的戰爭と目すべきではない。時時戰爭の景團氣に生活した何人もの經驗する如く、この時に於て日本の獨立は、間接ではあるがかなりの脅威を受けてゐた、これに反撥する防衛的の意義を持つものと觀察すべきである。

第三期において日本は従前と全く異なる時代に入る。この時代には直接にも間接にも獨立は確保され、防衛から攻勢へ消極から積極へと變化し、意識的に小日本から大日本へと膨脹の政策を辿つた。朝鮮の併合と滿蒙への進出は、この政策の實現であり、今に至るも繼續の半途にある。固より滿蒙の進出も日本の自己防禦といふ根據から説明が企てられるかも知れない、然し少く共その緊急さに於て前二期と劇然たる區別がなされねばならない。明治の末期から日本は第三期に入ると共に、全く新たな對外關係に足を踏み入れたのである。

對外關係の三階段に伴うて、國家主義にも消長があつた。第一期と第二期とに於て日本國民

は、外國の脅威と汚辱とに曝露されてゐた。それを排除することは、個人の成長の爲にも缺くべからざる條件であつた。而してそれを排除する方法は、唯個人が結合することによりてのみ可能であつた。かゝる狀勢の下に於ては、國家といふ統一體と個人とは二にして一であつた。國家か個人かといふ二者擇一が問題とならざる程に、兩者を區別する事が出来なかつた。この時代に育つたものは、當時いかに國を擧げて國家の爲に奉仕したか、國家の手段となることにより個人が生きて考へたかを、今も鮮かに記憶するであらう。筆者もこの景團氣のうちに育てられたのであるが、當時の國家主義の横溢は現代の青年の到底夢想だもすることの出来ない程であつた。かくて今日三十年代の後半以上の年齢の人々には、國家主義は抜くべからざる根柢を持つ。唯思索の修練によりてのみ、それより離脱することが可能であつた。だが第三期に入ると共に、事情は自ら異らざるを得なかつた。對外關係が一段落を遂げると共に、國民の眼は外より内へと轉じ、國家の獨立と名譽とから、國民生活の充實へと推移した。國家なる統一體に吸収し盡されたる個人が、漸く自らの地位を自覺して、國家と個人との分化を生じたのはこの時である。文藝界に於ける自然主義や人道主義、哲學界における理想主義、經濟學界に

おける社會政策學派、政治學界における民主主義、社會思想界におけるサンジカリズム、ギルド・ソシアリズム、マルキシズムの擡頭は、その各々が相互に對立し矛盾するに拘らず、等しく國家主義の衰頹に乗じたる潮流である。一言にしていへば、第三期に於て價値の究極は國家よりして個人へと轉化した。明治天皇の崩御に際してロンドン・タイムスの特派員が天皇の崩御と共に日本は一轉機に來た、今までは日本の勃興の時期であつた、今や日本の運命は降り坂であると云つたのは、少くとも國家主義への熱狂の凋落を指示した點に於ては、肯綮を得た觀察である。

然し明治の治世四十年を持續して根柢深く植ゑられた國家主義が、一朝にして根絶する筈がない。そのみでなく、支配階級が教育政策の根本として、國家主義を鼓吹しだしたのはこの時期からである。前期における國家主義は求めずして成立した、その意味に於て自然發生的であつた。然るに第三期に於ては意識的にそれを教育の指導原理とした。國家主義の權威が降下し始めた時に、その教育が活潑になつたのは異様の如くであるが必ずしもさうではない、凡そある思想を意識的に鼓吹することは、反對思想との對立を意識した時か、自己の思想の轉換

を自覺した時だからである。かくて小學中學の教壇から社會教育の演壇から國家主義は教授され、在郷軍人の結成と青年團の設立とにより、組織化され社會化された。

第三期に於て國家主義への懷疑の門は開かれたものゝ、それが大地に着いた個人主義を生まざる内に、國家主義の積極的教育が開始されたのである。二十年代と三十年代の青年も、彼等の先輩と等しく、この思想的雰圍氣の中に育てられる、それから離脱することは、彼自ら思索の道程をたどつた唯少數のもののみが可能である。かくて國家主義は搖籃の中で聞きほれた子守歌の如くに、日本國民のすべてに追慕される懐かしい神祕の世界である。

だがこゝに反問があるかも知れない。たとへ國家主義は以上の如くに根柢が深からうとも、日本にも資本主義は發展した。さすればそれを貫く自由放任主義と、更にその基礎としての個人主義が侵入した筈である。果して然らばそれは國家主義と正面衝突して何等かの痕跡を残したに違ひないと。之に答へるがためには私は、日本の資本主義發達の特異性を語らねばならない。

若し英國の資本主義を以て發達の常則的のものと看做すならば、日本及び獨逸のそれは變則

の徑路を辿り來つた。英國に於ては資本主義に先だつて封建社會崩壞の後に現はれた近代國家の成立があつた、而してその國家は政治上においては開明專制主義を、經濟上に於ては重商主義をとつた。資本主義は重商主義を敵として勃興し、國家（政府といふ意味における）の干渉保護を排斥して個人の活動を恣にすることを目標とした。従つて資本主義と自由放任主義と夜替國家觀とは分離すべからざる一體を形成した。

然るに日本に於ては明治維新と共に近代國家の成立した時に、先進國が既に資本主義を完成してゐたために、之と對抗の目的を以て政府が指導率先して資本主義完成の役割を努めざるを得なかつた。こゝに於て日本の資本主義は、開明專制的の國家と重商主義の國家とに對立するに非ずして、國家の開明專制と重商主義とを、缺くべからざる條件としてのみ發達することを得たのである。なるほど國會開設を眼前に控へた時即ち明治十三年頃、官有財産の拂下、官營事業の民營轉化等のことあつて、一時自由放任主義の實現の外觀がないではなかつた。然しそれは瞬時に止つて、明治の初年採られた重商主義は持續されて現代に及んだ。造船獎勵法、航路補助法、保護關稅の實施の如きは、その最も顯著なるものであるが、いまだプロレタリアか

らの要望なき時に於て工場法の實施されたるが如き、又以て當時の思潮を窺ふに足るだらう。之を要するに日本には自由放任主義の活躍した時代はなかつた。英國における重商主義が一旦解消して自由放任主義に代はられ、やがて新重商主義に移つたのと反對に、日本では自由放任主義を省略して、重商主義に終始して來た。之けだし日本の資本主義が日本の國家の維持と發展との用具として扱はれたからで、それは國家主義の羽翼の下に温められて成長した、その限りに於て日本に於ては資本主義のイデオロギーとしての個人主義と、その表現としての自由放任主義とは、唯國家主義の許容する枠内に於てのみ、歪曲され條件付けられて移植されたのである。それが國家主義を批判し克服するが如き、けだし思ひも及ばざる事ではなければならぬ。

更に反問があるかも知れない、日本に於ても明治二十三年の憲法發布と共に、萬機公論に決するがために議會制度が設けられ、言論集會結社等の自由が認められた。之は自由民權の思想の普及した結果ではないか、然らば之は國家主義の牙營を崩すことにはならなかつたのかと。なるほど明治十年前後に於てルッソー、モンテスキューやベンサム、ミル、スペンサーの文獻

が邦譯され、自由民権の思想の輸入されたことは事實であるが、遺憾ながら議會制度は上より與へられたもので、民衆の胸奥より溢れ出た自由主義の結晶ではなかつた。

私見によれば、明治十年二十年代に於て明治政府の要望は、いかに先進國と對等の地位に立ち、不平等條約の改正をなすかといふ唯一點に集注した。民衆の要望に比例せざる教育制度法律制度産業制度を逸早く施行したのは、實に之がために外ならない。今に至るまで我國の文物制度が外形の整へるに拘らず、國民の內的準備と照應を缺くは、その原因がこゝにある。議會制度を布きたるも亦、この政策の現はれに過ぎない。國家主義と對立する個人主義の基礎の上のみ立つべき議會制度は、奇怪にも國家主義の見地よりして承認されたのである。自由黨や改進黨の先輩の血を見た苦闘をば、私は無視するのではないが、然し彼等の抗爭が餘りに熾烈に至らざる内に憲法が布かれたのも、國家の平和統一を所期する國家主義に根據してであつた。かくして成立した議會制度は、今日に至るも民衆の議會主義的確信の上に立脚してはるないし、又國家主義と對抗し反撥する何物でもない。

今一つ附記すべきことは、日本の議會が藩閥に對抗する權力爭奪の目的を持つたといふこと

である。千七百八十九年の佛蘭西革命や、千六百八十九年の英國革命、又は千八百三十二年の選舉法改正は、第三階級の要望により實現された。たとへ第三階級は後に第四階級を裏切つたとは云へ、少くも當初においては「第三階級とは何ぞ」と問はれて、「それは今何物にも非ず、されどやがて一切たるべきものなり」といふに値する程、苟くも人格價値を自覺せるものたる限り、凡そ一切の人の普遍的原理を負擔してゐた。議會の設立は民衆の胸奥の琴線に觸れるほど、社會進化の一轉機であつた。だが日本に於ける議會は、薩長出身者の組織する政府に對抗して、權力の分配に與からんとする運動の結果であつた。その運動の成功に不必要なる限り、全民衆の個人人格の權威に訴ふることをしなかつた。薩長に對する土肥の出身者を首領とする政黨は、餘りにも地方的であり封建的であり、權力爭奪の露骨なる表現であつた。それはブルジョア革命といふに値するには餘りにもブルジョア前の運動である。現今の政黨が吾々の面前に演ずる醜態は、出發に與へられた傳統を唯踏襲するに過ぎないのである（本書第十二章「自由主義の再検討」参照）。

かくて國家主義は自己に對立し反抗する障礙に逢着することなしに、牢固不拔の勢力として日本國民の心理に膠着した。云ふなかれ、それは單に無意識的たるに止まると。無意識的であり潜在的たるほどに、國民の腦裡に深く沈澱してゐるのだ。若し人あつて之に點火せんか、無意識が意識となり潜在が顯在とならないとは、誰が保證しえようか。

(三) 最近に於ける國家主義

それでは最近に於て、國家主義を潜在より顯在たらしめた原因ともいふべきものは何か。私は次の各個のものを擧げることが出来ると思ふ。

第一は倫敦軍縮條約に關する一連の事件である。大巡洋艦や潜水艦の縮小が國防を危くするものと考へられ、それ自體として國家主義者を刺戟したのみならず、この軍縮條約は統帥權干渉や政府と軍部との軋轢等の諸問題を惹起したが、そのいづれもが軍部、國防、國家主義といふ必然の聯關を伴ふものであつた。軍縮問題は直接には海軍軍人のみの關心事たるかの如くに見えるが、實は國家主義宣傳の好題目であり、國家主義を國民一般に喚起するに充分であつた。

第二は所謂幣原外交に對する反感である。國際協調を基調とする幣原外交と、國家主義とは本來對蹠的に立ち、一方の失敗は當然に他方の擡頭を招來する。一般には幣原外交が妥當だと考へられても、對手國が支那であり、問題が滿蒙權益の確保にある時に、この外交はやゝもすれば批判を受け易い。殊に幣原外交の缺點は、正當なる主張をなす場合にも、斷乎たる態度を缺きたるにある。この點に對する不滿が、一般的にも幣原外交への不信を醸した。

第三は議會に對する失望である。一方に政黨内閣制度が漸く確立したと同時に、他方に議會及び政黨に對する不信の高まれるは、最近の著しき傾向である。殊に政黨の收賄や議會に於ける亂闘は議會に國政を委託しうるや否やに疑ひを起させた。一部政黨人に對立する國民全體、政黨の背後にあると思はれる財閥の利益に對する國家の利益が、この時に於て意識されることは極めて自然である。

第四は共產主義者に對する反感である。共產主義の主張する私有財産廢止に與せざるは勿論であるが、これに與する共產主義者が我が國體を破壊する運動を企て、勞農露西亞を祖國とし

てその指令の下に動くことは、反撥的に國體擁護と國民主義とを強めたことはいふまでもない。

第五は經濟的不況である。最近に激化した不況は、中産階級を没落せしめ、下層階級の悲境を更に深刻にした。その對策を奈邊に求めるかに就ては意見多岐に分れるであらうが、何等か資本主義の機構に變革を加へるの必要を感じしめた。悲境を體驗しつゝある當事者が國家の經濟統制を要望するのみでなく、暫く悲境の埒外にある者も、現状を放任することは國家の紐帶を緩めるものとして、國家の名に於て對策を要請するに至る。

第六は社會全般に漲る現状打破の要求である。吾が國の政治經濟等の一切が行詰りの状態にあり、陰鬱の氣が全社會に漲りつゝあるは、今日に始まつたことではない。之が苟も局面展開の可能性ありと思はしめるならば、いかなる新運動に對しても、敢て精細なる検討を試みる暇なくして、渴仰し共鳴せしめる原因となる。マルキシズムが吾が國に不相當の勢力をえたのも、この心理に依存することが多いのであるが、マルキシズムに結局信を置き得ない國民は、對案を國家主義に求めたのである。

第七は滿蒙への進出とその意外なる成功である。以上擧げた諸原因の結果であり、その意味に於て國家主義發露の結果たると共に、又國家主義擡頭の最大の原因となつたのは、昨年九月以來の滿洲事變である。一つの事件は必ずやある意識の結果である。それと同時に事件は意識を確立せしめ強固ならしめる。滿洲事變は國家主義の結果たると共に、事變に關する報知や事變に伴ふ諸活動は、一として吾が中に潜在して自らも知らざりし國家主義を意識せしめる吹奏曲とならざるものはない。由來滿洲は日本國民の國家主義的情熱を煽動する歴史的因縁がある。恐らく今後とも永く滿蒙問題は、國家主義の水源地となるであらう。

以上の項目は重要性の順位による排列ではないが、之等の原因が輻輳して現今の國家主義の擡頭を招致した。由來國家主義はその様相として、國民主義と革命主義と獨裁主義とを持つものであるが、上述の各原因を顧れば、之等の様相に照應することを見出すであらう。即ち第一の軍縮問題、第二の幣原外交への反感、第七の滿洲事變は、國民主義を喚起せしめ、第三の議會への失望は、革命獨裁主義を喚起せしめる。

然し若し之だけならば現今の國家主義は單に反國際主義と反議會主義たるに止まるが、國家

主義擡頭の原因の中で看過すべからざるは、第四の共產主義への反感と第五の経済的不況と第六の局面打破の要望である。共產主義はたとへ反感を惹き起したとはいへ、資本主義批判の眼を開かせた。経済的不況は當然に資本主義の變革を求めさせ、局面打破は主として経済組織の打開を意味する。こゝに於て現今の國家主義は、反資本主義といふ特異の色彩を帯びてゐる。これが従來の國家主義とその内容を異にする所以である。而して現今の國家主義が單に反國際主義反議會主義たるに止まらずして反資本主義的たるものが、國家主義と社會主義との接近を一應可能にした原因であり、又國家主義と社會主義との結合を、合理的たるかの如くに思はせた錯覺の原因でもある。

目下擡頭しつつある國家主義は日本國民の廣汎な層に亘つて浸潤してゐる。凡そ之と明白に對立する思想を把持せざる限り多少なりとも之に振り動かされぬものはあるまい。だが特に國家主義の負擔者たる數個の群のあることを忘れてはならない。その一は軍部であり、二は官僚であり、三は小農手工業者及び小商人である。

若し議會主義にして完成してゐるならば、軍部は政府に對して從屬的地位に退き、軍人は

それぞれ何れかの政黨に所屬するに違ひない。然るに我國に於ては、國際關係に於ける日本の地位からして軍備に重要性を置いたのと、我が憲法が軍部に對して特殊の地位を與へたために、軍部は日本に於て權力を持つ特異の社會群である。加ふるに有爲の材幹がこゝに集合し、勞資の階級から獨立し政黨抗争の渦中から脱却し、身を以て國家主義の負擔者を以て任じて來た。彼等は盡忠報公の至誠を持ち、捨身を以て所信を斷行する實行力に富む。彼等の公共の善に對する執心は多とするも、何が盡忠報公たるべきかに關する理論的検討を缺くことに遺憾がある。

官僚は戰前獨逸の誇りたりしが如く、日本の誇りでもあつた。開明專制主義を以て國內の施設を指導し來れる政府は、明治以來數多くして質の優秀なる官吏を育成して來た。たとへ彼等は近時政黨の勢力の下に抑壓されたとはいへ、今も尙日本において無視すべからざる勢力を持つ。彼等もまた政黨に偏せず階級に限らず、國家的見地に立つて至公至平の槓杆をとらうといふ自信を抱いてゐる。國家主義はこゝに一方の支持者を有する。

若し資本主義が發展の極に達したならば、小農や手工業者や小商人は、プロレタリアに沈没

してその影を潜めるかも知れない。然るに吾が國の資本主義の幼稚なる段階と日本の産業の特殊性とは、この一群の中産階級層をかなりの厖大さに保存せしめてゐる。彼等を國家主義に結ぶ特別の因縁はないが、彼等が反國家主義思想以前の殘滓たることと、若し資本主義を自然の進行に任せるならば、彼等は大資本家の壓迫の下に没落するの外ないので、彼等のすがらんとするは唯國家の名に於てその進行を阻止することのみにあるからである（拙著「歐洲最近の動向」参照）。

之を要するに軍部と官僚と中産階級との勢力は、何れもが日本の政治的經濟的進化が、先進國より一步遅れてゐることに原因する。わが社會が急激に變化せざる限り、彼等の勢力は依然として持續するだらう、その限りに於て國家主義も亦熱烈なる支持者を失ふまい。彼等は大本家の横暴を憎む點に於て共同戦線に立つ、この點に於て彼等は等しく反資本主義的である。だが反資本主義は當然には社會主義ではない、況んや中産階級は最も私有財産に執着するものである。反資本主義を當然に社會主義と誤認して、國家主義と社會主義とを結合せんとした所に、國家社會主義の迷妄がある。

だが私は次に視點を轉じて、社會主義の方よりの國家主義への接近の跡を辿らねばならぬ。

(四) 日本に於ける社會主義

吾が國の社會主義運動から、何故に國家社會主義が生れたかの理由を述べる爲には、暫く本文の冒頭に立ち返つて、國家社會主義と他の社會主義との異別を顧みる必要がある。他の社會主義と云ふのは、共產主義と社會民主主義とであるが、國家社會主義と共產主義との差異は、前者が階級國家論と國家死滅論とを採らないことと、國際主義を捨てて國民主義を採ることである。國家社會主義と社會民主主義との差異は、前者が侵略主義を採るに對して後者が平和主義を採り、前者が××革命と獨裁とを是認するに反して、後者が議會主義と言論自由主義とを採るにある。

こゝに於て何故に社會主義運動から、國家社會主義が生れたかといふ問題は、別言すれば社會民主主義が何故に國家社會主義へ轉向したかといふことと、共產主義から何故に國家社會主

義への離脱が生じたかといふ二つの問題に歸着する。私はその二つに就て各々の理由を語らねばならない。

日本の社會民主主義には、凡三つの潮流があつた。一は理想主義的社會民主主義であり、英國の社會主義に類似するものであり、之に屬する一派は社會民衆黨内にある。その二はマルクス主義の上に立つ社會民主主義で、獨逸社會民主黨の社會主義に類似し、社會民衆黨の大部分は之ではないかと思ふ。その三はマルクス主義の上に立ち、今は暫く合法政黨の假面を被るも必要あらば××革命と獨裁とを辭さない一派であり、その多數が勞農大衆黨にある。

之等三派の社會民主主義の内、第三のものは事實に於て共產主義と異なる所なきものである。従つて嚴密には社會民主主義に屬せしむべきではなくて、次の共產主義の範疇に含ましむべきである。第一の理想主義的社會民主主義こそは眞正の社會民主主義を代表するものであり、その社會哲學において個人主義を採り、國際平和主義を守り議會主義と言論自由主義とを固執するものであるから、之と國家社會主義とは必然に對立し反撥する。この一派は今に至るも國家社會主義と抗争しつゝ社會民主主義の孤壘を守りつゝある。

第二派は社會民主主義をとるものゝ、マルクス主義の理論を受容するものである。而して私見によればマルクス、エンゲルスの根本思想とその文獻とからは、社會民主主義よりも共產主義が歸結すべきであり、この點に於てマルクス主義者たる限りに於ては、カウツキーよりもレーニンの方が正當なのだと思ふ。従つて第二派は社會民主主義を唱へてはるたものゝ、議會主義と言論自由主義とを守らざるべからざる確乎たる信念があるのではなかつた。この派には早晩共產主義に轉化すべき可能性が、始めよりして包藏されてゐたのである。彼等が社會民主主義に執着したのは、唯暫く偶然の事情がそれを必要ならしめたに過ぎない。而して最近の國家社會主義は彼等を中心として擡頭し來つたのである。

然らばこの一派は何故に國家社會主義に轉向したのか、それには次の如き數箇の原因があると思ふ。

第一に帝國議會及び府縣會に對する失望である。議會に對する失望の中には三つの種類がある。その一は凡そ議會と稱する合議體の國政の審議機關としての職能の限界に對する失望である。この種の失望は誠に尤もであり、議會主義者は慎重にこの問題を考慮せねばならない、だ

が然しこの點が議會への失望となつたとは、すくなくとも日本の社會民主主義者については事實ではない。第二に議員の選出方法に關する失望である、一言にして云へば現存の選舉法を以てしては、民衆の意志が的確に議會に反映しえないといふ失望である、これも尤もな不満であつて、至急に選舉法の改正を企てることは、議會主義者の義務だと思ふ。第三の失望は最近に於ける中央及び地方議會に於ける無産黨の勢力に徴して、未來の發展性に對する失望である。現行選舉法の下に無産黨が不利なることは勿論であるが、現在に於ても今より以上の勢力を獲得することは困難ではない。然るに戦線の不統一、民衆の自覺の不足、無産黨が選舉に對する常住不斷の準備の缺乏等がこの不結果を來した。獨逸社會民主黨や英國労働黨の歴史に徴すれば、不利な條件に於ても着々として勢力を伸張しうる筈である。然し耐忍と辛抱とを持たないために、逸早く議會を通しての社會變革に絶望を抱くに至つた。

第二は共產主義者に對抗する手段として、國家社會主義によるの外なかつたことである。吾が國現下の社會主義運動界に於て、社會民主主義者と共產主義者とは、その思想に於てもその感情に於ても相對立しつゝあるが、社會民主主義者が共產主義者と自己を區別しそれと對抗す

る旗幟は、從來議會主義をとることにあつた。然るに前項の如き理由により議會主義に絶望するとせば、他に對抗すべき旗幟を求めねばならない。かくして選ばれたのが國家主義であつたのだと思ふ。

第三は最近の國家主義の横溢に影響されて、平和主義と國家論に動搖を生じて來たのであるが、これは次項の共產主義と一括して説明しよう。要するに以上の理由が從來社會民主主義を唱へた人々を、國家社會主義へと轉向を促した説明ではないかと思ふ。

それでは共產主義者又は擬似共產主義者の一群は、何故に國家社會主義へ轉回したのか。擬似共產者とは明白には自らを共產主義者とは呼ばないで、一應社會民主主義をとるかの如き外觀を装ふも、その實革命獨裁を是認する一派である。議會主義と言論自由主義とを、抜くべからざる確信を以て固執するものでない限り、その人は擬似共產主義者であるから、吾が國の社會主義者中にこの種の人々は決して少くない。彼等は革命獨裁を是認するのであるから、この點に於て彼等と國家社會主義者とを區別させる何物もない。彼等相互間の異別は侵略主義か、國際主義か民族國家論か階級國家論か、日本の國體を是認するか否かといふ點にある。彼等を

して共產主義を離脱せしめたのは、次の理由にあると思ふ。

第一は日本の共產主義者の中から、漸くマルクス主義に對する批判が現はれて、自己の本質を自覺したといふことである。マルクス主義は少くとも思想界に於ては、燎原の火の如き勢ひを以て吾が國を席捲した。それは國際主義と階級國家論と國家死滅論とを教へた。今まで盲目的に無批判的にマルクス主義を受容した人々は、これ等の理論をも無條件的に信じてゐた。然し今や日本のマルクス主義はその發展史上一段落を終へて、一應宣傳力の飽和點に來た。民衆がマルクス主義の何ものたるかを知らざる時には、他を顧みる暇なくこれを捕捉したが、今日漸く靜かにマルクス主義の内容を検討し審査し批判する段階に到達したのである。而して前項に於て述べたやうに、日本人の間に國家主義は半平不拔の勢力を持ち、唯思索の修練を経た者のみが、之より脱却することが出來た。而して日本人に根柢深く植付られた侵略主義と民族國家論と國體論とに直面して、マルクス主義は之を覆すほどに民衆の心の底に浸透してはるなかつたのである。マルクス主義に對する無批判時代を經過して、靜かな反省の時代に入れる時に、不拔の國家主義が再び胸奥より擡頭して、マルクス主義より離脱させるに至つたのである。

而して最近の思想界に於ける國家主義の擡頭がこの傾向を促進したことは云ふをまたない。

第二に日本の共產主義者は、日本に於て社會主義を實現するに當り、何が障礙となるかを意識するに至り、暫く國家主義と妥協することを戰術上の方便と考へたのである。前項の理由はマルクス主義からの心からの離脱であるが、之は心に轉回があつたのではなくて、實現手段としての術策である。嘗てバートランド・ラッセルは前世紀の末に「ドイツ社會民主主義論」(Bertrand Russell: German Social Democracy, 1896)を書いて、マルクス主義が獨逸に於て逢着する障礙を擧げて、一は無神論たること、二は家族共有論たること、三は國際主義たること、四は革命主義たることだと云つた。吾が國に於てもマルクス主義に對する反感は、それが社會主義たることにあるよりも、寧ろ他の方面にある。無神論や家族共有論や革命主義たることは、日本に於ては獨逸に於けるが如く反感の原因とはならない、寧ろ重大な反感は、國際主義たることと日本の國體を破壊するといふ二點にあると思ふ。この二點に逢着してマルクス主義は嚴に當る波の如くに、碎けるの外はない、この難點を處置せざる限りに於て、日本のマル

クス主義の發展は限界づけられてゐる。もし明敏なる社會主義者があるならば、逸早くマルクス主義から暗礁となるべき理論を削除するだらう、之は少くとも戰術上には巧妙な試みだと云はねばならない。

社會民主主義と共產主義との一派から國家社會主義への轉向を説明した以上の敘述にして誤りがないならば、この轉向には必然の徑路と偶然の徑路とがあると思ふ。

社會民主主義は議會に失望して議會主義を放棄すべきではなかつた。彼等は一方に於て現存議會制度の改革を實現すべきであると共に、他方に於て今よりも大なる熱情を以て議會主義に直進すべきであつた。彼等の最近選舉に對する失望は始より豫期さるべき失望であつて、之によつて今更に議會主義に疑ひを挿むべきものではない。彼等の議會主義がいかにかに始めよりして皮相なものであつたかを立證するに外ならない。かくして共產主義者に對抗する旗じるしとして、彼等は依然議會主義を固持すべきであつて、國家社會主義に鞍替すべきではなかつた。マルクス主義の階級國家論や國家死滅論や國體論は、始めよりして誤謬であつた。今日之を悟つたことは時の遅かりしを嘆ずるが、然し悟らざるよりも優ること數等である。だがマルクス主

義を無過失でないと認めることは、國際主義より侵略主義へ轉換することが正當だといふことにはならない。若しまた單に社會主義實現の戰術として國家主義と妥協するが如きは、眼前の功を急いで却て自己の理論體系に混亂を惹き起し、打算より出でて寧ろ打算に反する結果を醸すに過ぎないだらう。社會改革者の念とすべきは、明確な思想體系を保持するにあつて、事態に順應する變通の術に耽るべきではない。彼等は今重大なる過失を犯しつゝある。

だが國家社會主義への轉向が必然性を缺いてゐるやうとも、之は批判であつて之によつて轉向の事實を無視することにはならない。日本國民に不拔の根柢を持つ國家主義は今や潜在より變じて顕在となり時をえ顔に横溢しつゝある。この潮流に乗じて國家社會主義は相當多數の社會主義者を率ゐて吾が社會運動界に一勢力をなすであらう。然し前章「國家社會主義の批判」に述べたるが如く、國家主義と社會主義とは相反撥する異質物である。偶然の事情が暫く國家主義を反資本主義たらしめ、社會主義を國家主義に接近せしめたに過ぎない。やがて彼等自らが同舟の吳越たることを意識して袂を別つに至るまで、自己と伴侶とに錯覺を抱きつゝ、手を手をつないで進むだらう。唯彼等が別離する時は、日本の社會主義運動に惑亂を生じ、保守主

義の勢力を増加するといふ憐れな業績を残して、社會主義が國家主義より抛擲される時であらう。

(五) 結 論

最後に國家社會主義擡頭の社會思想史上に於ける意義に觸れよう。

この擡頭は我國に於て國家主義なるものが、いかに根蒂の深きものなるかを知らしめた。マルクス主義がかくも思想界に勢力を揮ひたるに拘らず、結局國家主義を精算するには何の効果もなかつた。而して國家主義の強大なる所、そこに社會主義は永久の蹉跎の石に逢着せねばならない。この石を除去せずして日本の社會主義は着實の前進をなし得ない。外國に於て國家主義の牙城を破れるものは、實に理想主義的個人主義であつた。社會主義は決して理想主義的個人主義を敵とすべきではなくて、それをして自己の前進の路を開拓せしむべきであつた。然るに國家主義と照應して理想主義的個人主義を挾撃したる結果は、遂に社會主義を前進せしめずして國家主義を増大せしめ、社會主義は保守主義の壓迫の下に苦しまねばならなくなつた。自

ら播ける種を自ら刈らねばならないのは、慘ましい思想界の悲劇である。

次にこの擡頭は我國のマルクス主義の普及が一轉機に來たことを物語る。無人の境を行くが如くに侵入したマルクス主義は、外延的には一應普及の飽和點に達したと共に、靜かに自己反省と自己批判との時機に來た。その階級國家論と國家死滅論と、消極的國民主義をも無視する理論とは、早晚清算せねばならなかつたのが、今やその時は到來したのである。而して之等の理論の清算は單にそれのみに止まらないで、更に進んで唯物辯證法の哲學にまで清算の手を延ばさねばならない。更に今までマルクス主義者ならば進歩的な殉教者たるかの如くに思はれ、マルクス主義に反對するものは恰も人でなきが如くに思はれ、一の思想を採るか否かに道德的評價を伴つたのは、吾が思想界における奇怪な現象であつた。このことがマルクス主義者に玉石混淆を惹起し、マルクス主義のためにも喜ぶべきことではなかつた。今やマルクス主義と反對の思想を持つものが、堂々と社會を歩みうることは、思想の自由といふ立場からは、少くとも一段の進歩だと思ふ。

最後にこの擡頭は、新たなる社會思想を待望せしめる。マルクス主義が一轉機に來たことは

思想界の喜びである、然しそれよりの離脱が、國家社會主義への轉向を意味するならば、思想界の損失でなければならぬ。マルクス主義か國家社會主義かの二者擇一のみが存在するは、吾が國に於て他の社會思想の體系が存在しないからである。ラッサール嘗て曰く、「世に憂ふべきは一の誤りに誘發された他の誤りである」と。誤れる國家主義は誤れるマルクス主義を誘發し、更にそれは誤れる國家社會主義を誘發した。マルクス主義から階級國家論と國家死滅論と無批判的な國際主義とを整理し、當然にその前提としての唯物辨證法の哲學を清算する新しき思想體系の出現こそが、現下の日本の緊切な要望でなければならぬ、而してそれは理想主義的社會主義でしかありえない。

若しそれマルクス主義の革命獨裁主義は、本來國家主義に伴ふものであり、それなればこそ日本に於て國家主義が優勢なるに伴ひマルクス主義がかくも強大の勢力を張りえたのである。マルクス主義者は言論の自由と暴力否定とを唱へて、社會進化を常正に導くべきであつたに拘らず、徒らに民主主義を敵とするに急なるの餘り、社會を擧げて暴力行使と專制獨裁とに傾けしめた。左右兩翼は互に暴力を揮つて、社會を擧げて修羅の巷と化して了ふであらう。その被

害者は結局に於てマルクス主義者であることは、正に奇怪なる運命である。

昭和七年二月廿九日乃至三月廿一日「帝國大學新聞」

(五) 國家主義の批判

(一) 現代日本の根本問題

今日盛に街頭で叫ばれる非常時といふ言葉は、普通に一九三六年を控へた日本の國際的危機と云ふことに限られるかの如くである。然し日本が臨みつゝ非常時は、單に之だけではない。固より國際的不安もその一つではある、然しその外に社會的不安と政治的不安とが擧げられねばならない(本書第一章「非常時の實相とその克服」参照)。人は更に此の外に思想的不安を附加するかも知れない。だが普通に云ふ思想的不安とは、主としてマルキシズムの蔓延に對する不安を意味するらしいが、それならばそれは社會的不安に對する一思想としてのマルキシズムを對象とするもので、思想的不安と云ふ言葉には該當しない。若し思想が動搖して安定を缺くことを思想的不安と云ふならば、その意味の思想的不安のこの國に存することは確かであるが、

前に擧げた三種の不安は畢竟するに、各種の問題に對する思想の動搖不安から由來してゐるので、此の意味の思想的不安はすべての不安に伴ふもので、特にそれだけを獨立に引き離して別の第四の不安に數へるのは當らない。

唯こゝに思想的不安と云ふ言葉に適當した一つの問題がある、それは事物を判斷する終局の價値に就て、混亂と惑迷とが起りつゝあることである。凡そ吾々が個人の事にも社會の事にも、何等かの判斷を爲す場合には、常に一定の價値觀念を前提とし、之によつて是非の判斷を爲すのである。勿論その價値觀念は、人によつて意識的なる場合と無意識的なる場合との區別があらう。前の場合は思索と反省とを経過した場合であり、後の場合は唯傳統と因襲とに依る場合である、然しかゝる區別があるにしても尙何れの場合にも、人は終局の價値あるものを前提として、事物の批判を爲すことに就ては差別はないのである。此の價値觀念は國際問題に就ても、社會問題に就ても政治問題に就ても、あらゆる問題の根柢に横はつて、それを解決する指針となるもので、此の意味で思想的不安は前三種の非常時の不安の基本的條件をなすものと云ふことが出来る。

それでは吾々日本人の多數を支配しつゝある終局の價值は何であつたか、私は二つを擧げることが出来ると思ふ。一は國家主義であり他は利己的個人主義である。吾々が幼少の時代からいかに父兄の膝下に於て學校の教室に於て、日本帝國の膨脹と發展とに、輝かしい矜誇の念を鼓吹されたかを顧るならば、吾々の中の國家主義を否定することは出来まい。而も國家主義と併行して、吾々を指導する價值觀念は、自己の立身と出世とを要望する利己的個人主義である。吾々の日常の努力と勤勉とは、此の觀念により鞭撻されてゐないとは云へまい。國家主義と利己的個人主義、之が吾々の指針となる終局の價值原理であるならば、吾々には價值の原理が二個あつて、何れも終局性を主張してゐることとなる。然し世に終局なるものは、唯一つあつて複數ではありえない、それなのに吾々の間に終局の價值あるものは、二つあつてその間の關係は曖昧に葬られてゐる。こゝに吾々の價值の混亂が伏在し、更に價值の混亂は社會生活の動搖の基礎となつてゐる。若し現代日本の最深の問題に着眼する人があるならば、彼は日本人の價值の原理を統一し、唯一の終局のものを求めねばならない筈である。

それでは今迄の價值原理の一つであつた利己的個人主義を以て、唯一の價值原理と爲さんと

するか。利己的個人主義は終局の價值あるものを物質に置いて、それを各個人が獲得すること内容を以てゐる。所が物質の數量は有限であるから、之を獲得する爲には當然に他人を排斥して自己のみが獨占することとならざるをえない、これ利己的個人主義の支配する所、そこに常に爭奪の修羅場が現出せざるをえない理由である。今まで利己的個人主義の跳梁に多少なりとも、制限を附けて抑制したものがあつたとすれば、それが之と併行してゐた國家主義であつた。若し國家主義を排除して利己的個人主義のみを残すとしたならば、世は無制限の修羅場と化するの外はない。それでは國家主義のみを以て唯一の原理とするか。人は國家主義を以て利己的個人主義と對立し反撥する兩極のものと考え勝ちである。然し實際は國家主義と利己的個人主義とは、後に述べるが如く一抹の共通性を持つて、表面異なるが如くにして實は同一の地盤の上に根ざしてゐるのである。又國家主義は價值の原理として之を以て一切の事物を批判するには、不充分であるといふ弱點を持つてゐる。今まで國家主義に配するに利己的個人主義を以てせざるをえなかつたのは、一に國家主義の此の弱點を補充する爲に、別個の原理を借用する必要があつたからである。

へて、待機してゐるに過ぎないのである。

國家と云ふ言葉には二つの意味がある、一つは強制権力機關といふ意味である、かのマルキシズムが階級的國家觀を唱へる場合の國家とは、此の意味の國家である。他の意味の國家とは、強制権力によつて統一されてゐる個人の集團である。凡そ個人の集團を廣く社會とするならば、此の意味の國家は社會の一種である。日本國民は一旦緩急あらば國家の爲に身命を擲てよと云ふ場合の國家は、強制権力機關としての國家ではない、日本人なる個人の集團たる社會としての國家を意味するのであつて、國家主義が第一義的に價值ありとする國家も亦此の意味の國家を指すのである。

吾々個人は他の侵入を許さない獨立の生活領域を持つと共に、又他面に於て他の個人と共に各種各様の社會を構成して、その一員として自己の生活の擴大豊富を營んでゐる。家族、學校、市町村、教會、労働組合、消費組合、同業組合、カルテル・トラスト等數へ來れば無数の社會が、吾々の身邊を圍繞してゐる。實に多くの社會が多彩に交錯してゐることこそ、近代生活の特徴でなければならぬ、而してその社會の一種としてこゝに國家がある。國家も亦一つ

の社會であるが、此の社會が他と異なる特色の一つは、生れながらにして吾々がその社會の一員であり、任意的加入を俟たずして加入を強制されてゐること、國籍を脱して他の國家に加入せざる限り、吾々は出生と同時に國家の一員と看做されてゐることである。更に特色の第二は、此の社會の目的が強制権力にあることで、他の社會も亦必要な限りに於て強制處罰の權限を持つてはゐるが、それも窮極に於ては、國家の強制権力に依頼せざるをえない。國家と云ふ社會の目的が強制にある點が、教會の目的が宗教にあり學校の目的が教育にあり、その他夫々の社會が持つ夫々の目的と異なる特色である。

こゝに國家と同じく社會の一種でありながら、國家との聯關に於て特説を要するものが二つある。その一つは民族であり他の一つは人類である。國民とは言語と歴史と風俗慣習と感情と利害とを共通にする個人の集團であつて、之が社會の中で最も包括的な又目的の最も廣汎な社會である。人類は未だ全き意味での社會にまで進化してはゐない、然し或は國家を仲介として、或は個人直接に、吾々は異なる國家の人々と、經濟的に文化的に接觸して、既に相當の共同意識を抱くに至つてゐることは否定出來ない、若し人間の社會構成の進化の徑路を考へるなら

ば、始めは家族部落種族と云ふ狭い社會にのみ生活してゐたものが、徐々として進化して遂に民族にまで到達したが、やがては人類といふ社會を完全な社會とするに至るかも知れない、今吾々は此の進化發展の道程に在ると云ひうるであらう。

國家と民族とは會ては同一の個人を包括してはゐなかつた。一つの國家が異なる民族を包括し、一つの民族が異なる國家に分屬してゐた。然し「一民族即一國家」といふ主張が國民主義の名に於て唱へられてから、同一の民族は同一の國家を構成し、異なる民族は獨立して一國家を構成することが行はれた。實に近世以來國家の分解と合同とは、國民主義を基調として爲されたのであるが、特にその傾向を強めたのが十九世紀に於てであつた。共通の感情と利害とを有する個人の集團たる民族が、獨立の強制權力の下に立たんとする要望は自然であり亦至當であつた、その故に國民主義は苟くも人間の成長を希求するあらゆるものの共鳴と同感とを持ちえたのであつた。然るに國民主義を實現して、一民族が一國家を構成した後には、自己の國家の下に異なる民族を從屬せしめんとする運動が始められた。之が帝國主義と稱されるものであり、會て國民主義が國家の合同と分解とを果したと同様に、今や夫々の國家が膨脹發展を企てて人

類社會に角逐鬭争の混亂を現出しつつある。

私は以上に於て簡単に國家の意味と、國家の他の社會との關係を述べた。人若し個人と個人の集團たる社會を展望する時に、そこに國家主義と類似の思想を到る所に見出すであらう。それは個人が集團を爲すや、必ず集團に個人よりも超越的な價值を與へんとする思想であつて、之を全體主義と總稱する事が出来る。家族を至上として個人を之に從屬するものとし、結婚は汝個人の爲のものではなくて、家族の爲であると云ふ結婚觀は、家族を中心とする全體主義であり、教會の爲には個人の判斷は犠牲とせよと云ふ舊教主義は、教會を中心とする全體主義である。彼の國家主義とは全體主義と稱する思想の一種であつて、國家を以て至上絶對とするものである。故に國家主義はその發現の方向から二様に區別することが出来る、その一つは國家内に於て、個人と他の種類の社會とに對抗して、夫等を從屬的のものとして自己の至上の位置を主張するものであり、他の一つは人類と云ふ社會の中に於て、他の國家を從屬的のものとして、自己の利害と幸福とを第一の關心とするのである。前者の立場から國家主義は、個人主義（それが利己的個人主義であれ理想主義的個人主義であれ）に對立し、又他の社會の獨自

の價値を主張する思想例へばマルキシズムの階級至上主義に對立する。後者の立場から國家主義は、國際主義平和主義に對立する。國家主義を價値原理として批判することは、かゝる至上絶對の地位を國家に與へることが正當か否かを、検討することに外ならないのである。

(三) 國家主義の發生過程

國家主義とは國家に至上絶對の地位を與へるものだから、單に國家に存在の理由あることを肯定することではない。人は國家に充分の存在理由あることを認めうる、何故なれば國家と云ふ集團は、吾々の成長上必要な基本的條件だからである。又國家の目的とする命令強制は、今日の人間成長の段階では、尙排除するをえない必要なものだからである。だが此のことから國家主義が正當だと云ふ結論が、直には導き出されない。そこには理論上の飛躍がなければならぬ。所があることが必要な存在だと認めて、その存在を繼續することに努力が爲されねばならない時に、その努力を最も緊張せしめる爲に、人は往々にしてそのことの價値を誇張し、比較的重要なだと云ふことから、やがて絶對的に價値あるものだと云ふことに推移する。必要な手

段であつたものが、必要なことそのことの故に、手段としての地位を蟬脱して、それ自身目的としての地位にまで高揚されることは、資本主義下に於ける財産——その表象としての貨幣——を考へれば、直に理解されるであらう。財産は必要であつた、然し必要であると云ふことは、既にある他のことの爲であることを意味するのであるが、やがて必要な財産は、財産を必要ならしめた目的を度外視して、それ自身目的となり、曾ての目的と地位を倒錯して曾て財産を驅使したものが、今は財産に驅使される奴隷となる。かゝる價値の變革過程の一つが、國家に就ても行はれ、こゝに國家存在の理由を承認することから、國家を絶對至上のものとする國家主義なる原理が發生して來たのである。

國家主義は近世思想上に於て、二個の段階を経過してゐる。一は中世の末期から近世の始めにかけて、封建的の對立を統一して、所謂近代國家の成立した時代である。逸早く國民主義の下に國家を構成した英佛二國に、先づ第一期の國家主義は現はれた。人は先づ集團の中に生れて集團の中に生きる。個人が集團の中に在つて、自己と集團との分化を意識するには、集團が相當成熟して、その使命を完了した後に於てである。従つて第一期の國家主義の時代には、

個人の自己意識は未だ擡頭するに至らずして、個人は國家に吸収され、國家と個人とは分化對立するに至らない。當時に於ては國家は至上絶對の地位を占めてゐた、然し之は國家に對立するものが現はれなかつた故であつて、此の點に於て國家は至上の地位を占めてはゐても、意識されることなく唯事實上至上の地位を占めてゐるに過ぎない。

やがて國家の中の個人は、自己の全部が國家に吸収されてゐるのではなく、國家の一員としての自己の外に獨自の存在としての自己を意識した時に、國家と個人との分化對立が行はれた。かくして當然に國家主義に反對して、個人に至上絶對の地位を與へ、唯個人に必要な限りに於てのみ國家に存在の意義を認めんとする思想が現はれた、之が十七八世紀に於ける個人主義である。だがその個人主義は前時代の國家主義への反動として生れたことの故に、不必要な點にまで國家への對立と反撥とを強調した。又その個人主義は機械論的の個人主義であつた、その故にその個人主義が普にそれ自身肯定しえないのみならず、國家の存在を承認した限界内に於ても、個人と國家との聯關が説明し兼ねると云ふ弱點を持つてゐた。ここに於て當時の個人主義を國家に調和せしめんとする試みが企てられた、その任務を果したのがジャン・ジャツ

ク・ルッソーの「社會契約論」(一七六二年)である。

彼は個人主義の時代に生きながら、又ある意味に於て「社會契約論」に於て個人主義の代辯書を書きながら、自ら知らざる裡に個人主義を超越する立場に立つてゐた。彼は同書第一卷第八章「市民國家」の中に云ふ「自然状態より市民國家への變化こそ、人間にとつて實に著しき變化を醸すものである。それは彼れの行爲に於て本能に代ふるに正義を以てし、彼れの行動に今迄缺けたる道德性を與へるからである。……」又更に云ふ「吾々はすべて此の事より以上、人が市民國家に於て取得するものとして、道德的自由を附加したい。道德的自由とは、唯之のみが人をして真正に彼自身の支配者たらしめるものである。食慾の單なる衝動は奴隷である、然るに吾々が吾々自身に規定する法律に服従することをこそ自由と云ふのである」と。然らば彼れの所謂法律とは何か、それは一般意志を表現するものであり、一般意志とは各個人の特別意志と異り、又特別意志の單なる集合なる全部意志とも異り、常に正しくして過つことなく、常に公共の福利を念とするものであると云ふ。ルッソーが人間に正義と道德性の輝く餘地を認めたことは、從來の個人主義の利己的人間觀と著しき對照を爲すものである。此の人間觀

はやがてカントに傳へられて、その道德哲學の基本を爲した。國家の意志たる法律に従ふこと、愈々多くして自由愈々多しと云ふ所に、從來と異なる自由の意義を見出し、國家と個人とを對立反撥するものとする前代の個人主義を蟬脱して、個人と國家との調和を企てたものと云へる。然し國家が常に正しくして過つことなき一般意志の主體であるならば、國家は批判されるべき對象ではなくして、正義の權化だと云ふこととなる。彼は個人と國家とを調和することから既に超脱して、國家主義の先驅者となつた。ルッソーを更に發展せしめたのが、ヘーゲルであつた。彼は「法律哲學」(一八二〇年)の中に於て、國家は道德的理念の實現なりとし、國家はそれ自體に於て理性的なりと云ひ、又國家はそれ自體終局の目的にして、個人に對して最高の權利を有する、個人の最高の義務は唯國家の一員たるに在ると云ふ。かくてヘーゲルに於て、國家主義は第二期に到達し、こゝに近代國家主義は古典的の代辯者をえたのである。

(四) 世界觀と社會思想

英佛の如く近代國家が逸早く成立して、第一期の國家主義に次いで個人主義が逸早く擡頭

し、その勢力を揮ふ期間の長かりし國は、結局個人主義を以て終始した。たとへ英國に於てバークの思想が起り、佛國に於てシャトリアン等の思想があつたとしても、遂に個人主義の根柢を揺がすに足りなかつた。又その個人主義が利己的個人主義から理想主義的個人主義に移したとしても、個人主義を價值原理とするに變化はなかつた。英國に於て十九世紀末にボサンケ等によつてルッソー、ヘーゲルの國家主義は唱へられたが、その影響は大を爲さずして終つた。此の點に於て米國も亦英佛兩國と同一の範疇に屬する。之に反して獨逸伊太利の如く近代國家の成立が遅れて、第一期の國家主義が十九世紀の中葉まで繼續した國に於ては、國家を至上絶對の王座より引き降す個人主義の擡頭する充分の餘裕なき間に、既に帝國主義的發展に接續して、直に第二期の國家主義を迎へて、國家主義は殆ど不動の原理として支配し續けた。吾が日本の如きも亦獨伊の範疇に屬するもので、明治維新以來國家主義は不斷の信條として終始し、たとへ自由主義が輸入されたとしても、自由主義の基礎原理たる個人主義は排斥され、自由主義すらも國家主義の許容しうる限りに於てのみ、輸入を許されたに過ぎなかつた(本書第十二章「自由主義の再検討」参照)。

人は或は云ふかも知れない、國家主義は獨逸日本の如き特殊の國の思想でもなければ、又歐洲大戰後の一時的傾向でもない、自由放任主義の凋落した前世紀末に於て、國家の活動の擴大するや否や、爾來永續したる世界的思潮であつて、英國の如き個人主義國でさへ、國家の職能は膨脹して、國家主義に轉化したのである。此の説に答へることは、國家主義の本質を明瞭ならしめて、前段の所説を補ふことに役立つだらう。元來國家主義とは、國家を以て最高の價値の所在とする思想で、之に對立するものとして暫らく個人主義を採るならば、之は個人を以て最高の價値の所在とするもので、共に價値原理上の對立で、別の言葉を以てすれば世界觀上の對立である。之に反していかにすれば最高價値としての國家又は個人に役立つか、個人の自由活動に放任する自由放任主義が是か、或は命令強制機關としての國家の活動を擴大するが是か、と云ふ對立は、社會思想上の對立であつて、世界觀上の對立とは領域を異にした別個の對立である。自由放任主義と云ふ用語の代りに、往々にして個人主義と云ふ言葉が使用されることがあるが、此の場合の個人主義とは社會思想上の用語であつて、世界觀上の個人主義とは、言葉は同一であるが内容を異にするので、個人主義に此の二義あることを峻別する必要がある。

る。命令強制機關としての國家の活動を擴大せんとする思想を、ダイシー教授は曾て團體主義コレクティブイズムと稱して、社會思想上の個人主義に對立させたが、若し之を國家主義と云ふならば、國家主義なる言葉が一は世界觀上に他は社會思想上に二義に使用されてゐるのである。

従つて世界觀上の國家主義は必ずしも、社會思想上の團體主義を伴ふことにはならない。若し國家に奉仕する最上の路が、各個人の自由活動に放任するを可とするならば、社會思想上の自由放任主義を採らないとは限らない。十九世紀の獨逸や明治時代の日本が、自由放任主義を採用した場合が、稍々之に近似するものである。同時に世界觀上の個人主義を採りながら、社會思想上に團體主義を採ることは、十九世紀後半以後に於ける英國がその適例であらう。勿論團體主義を採るならば、世界觀上の個人主義よりも國家主義に傾くことの可能性は多いだらう、又個人主義の思想構成の如何によつては、團體主義を社會思想上に採ることの不可能の場合もあらう、然し理論上は世界觀と社會思想とは嚴格に區別されねばならない。恰もある人が營利の爲に狂奔してゐる場合に、その人は營利の外何物もなき世界觀を抱くこともありうると共に、同じく營利に狂奔しつゝ獲得したる利益を公共事業に寄付して心樂しむといふ世界觀を

抱くこともありうる。外面に現はれた行爲の形式は同一であらうことも、その心情に於て異なるのと同一である。従つて同じく帝國主義を採りながら、ある國では國家主義の上に立ち、ある國では個人主義の上に立つことが考へられうる。歐洲諸國が最近に於て外部的に現はした行動は同一であるが、そのことは各國が等しく國家主義を採つてゐると斷言することにはならない。國家主義を原理としてゐるかどうかは、別の材料を加へて再検討することを必要とするのである。

要するに國家主義と團體主義とは必然に伴ふものではない、従つて最近數十年の世界を擧げての團體主義の傾向を以て、世界觀上各國一様に國家主義を採りつゝあると云ふのは當らない。此のことを強調する必要のあるのは、個人主義の世界觀は必然に自由放任主義を伴ひ、團體主義と反撥するものと獨斷し、自由放任主義は現代に於て採りえない、故に當然に國家主義を世界觀として採らざるをえないと妄斷するものが多いからである。これ一に世界觀と社會思想との混淆に由來するものである（『改造文庫』「リツケルト論文集」は此の點に於て参考に値する）。

(五) 國家主義の理論的缺陷

世界に於ける少からざる國が國家主義に向ひつゝあるに拘はらず、又日本に於て國家主義が牢乎不拔であるに拘はらず、私は斷乎として國家主義に反對せんとするものである。

先づ國家主義は價值原理として論理上に缺陷がある。第一に、國家主義は國家を以て至上絶對の地位に置くのであるから、若し論理に忠實であるならば、國家の現狀に放任して袖手傍觀に陥るの外はない、何故なれば若し國家の現狀を批判して之を改革せんとするならば、國家は既に批判せられる對象となつて、批判するものではない。然るに批判されることは、己れを批判するより高きものを前提條件として認めざるをえない。而も國家主義は國家を以て唯一絶對のものとして看做して、より優位のもの存在を否定するのであるから、國家主義より來る論理上の歸結は、國家の現狀を維持する保守主義だと云ふこととなる。だが此のことは後に述べることで、今こゝに私が論及しようとする點ではない。多くの國家主義者は歸結が保守主義に到達すべきに拘はらず、必ずしも現狀放任論者ではなくて、寧ろ國家の現狀に不満なる悲憤慷慨の

長に必要な条件を與へるに在ると云はねばならない。然し此の答へは正に國家主義と對立する理想主義的個人主義より來るもので、國家主義は自己と對立する價值原理を排斥しつゝ、結局尙かに反對の原理を採用せざれば、成立しないと云ふこととなり、自己の思想の中に自己と矛盾する原理を包含して、二元的の不統一を犯すと云ふ結論を承認せざるをえないこととなる。之が國家主義の第一の缺陷である。

第二に、國家主義が價值原理たる爲には之を以てあらゆる事物を批判しうる基準でなければならぬに拘はらず、實際には國家主義を以てして批判しうる事物は極めて僅少の範圍に限られると云ふことである。あることが國家の爲に役立つか否かは、直接國家を代表する人物の行爲か、又は國家に影響する因果關係の直接的の行爲かに限られる。例へば政府當局がある政策を行はんとする時に、國家に役立つか否かは、決定の基準となりうるだらう。又戰場に於ける軍人が突進するか退却するか決定も亦國家主義によつて爲されるだらう。又自國の機密を外國に漏洩すべきか否かも、國家に依つて決定しうる。然し國家主義の活動しうる領域はかゝる場合にのみ限定されて、一般民衆が日常の業務にいそしむ場合、戀愛し結婚し勉學し社交する

場合、一言にして云へば日常平凡の生活に就ては、國家主義は茫漠として、行爲の決定の基準となりえないことに氣が付くであらう。例へばこゝに青年があつて、いかなる婦人と結婚すべきかを考へる時に、何れの婦人と結婚することが國家に役立つかでは、何等の決定をも爲しえないのである。之が國家主義の價值原理としての缺陷でなくて何であらう。だがその缺陷は單に之だけではない。此の缺陷を補ふ爲に國家主義は必然に別の原理を補充的に借用せざるをえないこととなる、此の補充的任務を果す爲に、日本に於て使用されてゐるのが、利己的個人主義であつた。

利己的個人主義によれば、國家主義では出來ない行爲の決定が爲される、例へばいかなる婦人と結婚すべきかと云ふ時に、利己的個人主義で兎も角一つの決定に落付くことが出來るだらう。なるほど行爲の決定原理として役立つことにはなるが、利己的個人主義がいかん吾々の社會に毒を流してゐるかは、既に多くの人の知る所で今更に説明を必要としまし。それは舊に理論として成立しないのみならず、弊害の著しきものがあるのである。かゝる原理を借用せねばならない所に、國家主義の缺陷がある。一つの原理で任務を果しえないで、他の原理を借用

すること、既に二元的の不統一を曝露してゐるが、國家主義と利己的個人主義とは凡そ正反對のものである。一は國家と云ふ全體の爲に個人を犠牲とせよと命令し、他は個人を萬能とせよと云ふ、之が對蹠的のものでなくて何であらう。かゝる對立し矛盾するものを、吾々の社會は平然として包擁してゐるのである。吾々の周圍に國家主義を盛に標榜する名士が、公人として又私人として、國家主義とは似も付かない醜怪な事件を醸してゐるのは、思へば無理からぬ所もある。日本の社會の××は、實にかゝる價值原理の混亂に原因があると云はねばならない。前に國家主義は窮極に於て理想主義的個人主義を援用してゐると云つた。然し此の場合は暗々裡に於てであつたが、今や國家主義は明白に利己的個人主義を援用する。凡そ價值の原理は終局的であり統一的であり唯一的であらねばならないに拘はらず、一つの價值と併立して他の價值を併用するならば、既に價值原理として成立しない、國家主義は遂に破綻に陥らざるをえなくなる。

(六) 國家主義の弊害 その一

以上は國家主義の理論上の缺陷であるが、國家主義より來る弊害は、更に特説される必要がある。第一に國家主義は結局保守主義に陥ると云ふことである。前に述べたやうに、國家主義は國家を以て至上絶對のものと考へるのであり、至上絶對のものに批判を加へることはありえないから、若し國家主義の理論に徹底してゐるならば、結局國家の現状維持を謳歌するの外ないのである。だが國家主義と保守主義との關係は、別の方面からも説明することが出来る。國家主義の古典的論據は、ルッソー、ヘーゲルにより與へられたやうに、吾々に内在する理性が外部に實現したものが國家だと云ふことに在る。吾が國の國家主義者はルッソーやヘーゲルの如き精緻微妙な論據の上に立つとは思はれないが、暫らくルッソーやヘーゲルの論據の上に立つと假定すれば、理性とは一切を批判する源泉である、若し理性の實現したものが國家だとすれば、國家は一切を批判する主體でこそあれ、批判される對象ではなくなる。國家を批判すること理性を批判することであり、理性は批判する源泉であつて批判されるものではないから、國家を批判することは、ありえないこととなる、國家の爲すあらゆることは、そのまま承認し服従せざるをえず、之に異議を挿むことは理性に對する冒瀆だと云ふことになる。こゝに

だが之だけならまだよい。國家主義は國家を以て批判を超越する神聖不可侵の王座に据ゑる、その結果として人は國家の命令に唯々として服従することを以て能事終れりとする、かくてそこには機械的に×××××のみが作られて、潑刺たる道徳的批判の源泉は枯渴する。「すべて氣高き思想は常に個人より唯個人のみにより来る」にも拘はらず、盲従を事とする個人よりのみ成る國家は、遂に脆弱な弱者の集團として己れを見出し、國家主義者は自らの蒔いた種を刈らざるをえないだらう。道徳的批判の源泉の枯渴した所に、意志自由の自覺がない。その土壤にマルキシズムの唯物論の種子が蒔かれた時に、何等の反對なくすくすくと成長するだらう。國家主義の旺盛なる所到的所に、マルキシズムが猖獗を極めてゐるではないか。マルキシズムの唯物論から来る意志決定論と國家主義から来る機械的服従とは、一抹相共通するものがあるからである。マルキシズムを蛇蝎の如く忌み嫌ふ國家主義者が、自らマルキシズム醜態の條件を醸すとは、正に運命の惡戯である。

(七) 國家主義の弊害 その二

國家主義の弊害の第三は、それが武力崇拜に陥ることである。自國の運命を第一義的に考慮して、他國を從屬的に考へる國家が併立してゐる時に、そこに當然に角逐鬭争の修羅場が演出されねばならない。而も國家主義は國家を以て至上絶對の地位に置くから、國際間の紛争を解決するに、自己より高き判決の聲を認められない。かくてその結果は武力を以て解決するの外はない。戦争の慘禍がいかに大きなものであるかは、今更に説明するまでもないが、之と併せて國際問題に對する筆者の見解は、別に一文を草することとしよう（本書第五章「國際的不安の克服」参照）。今こゝで必要なことは、國際上に弱肉強食が行はれることが、國內の人心に及ぼす影響である。國際上に強者が支配することは、翻つて強力の讚美暴力の崇拜となつて現はれて、理性の聲は影を潜めて、原始的の力が横行する。國家主義は別な徑路からも、×××××傾き易いが、武力崇拜と云ふ一點からも、それへ落ち行く危険性がある。更に國家が他の社會と區別される特徴は、命令強制を目的とする點にあると前に述べたが、特に國家と云ふ社會を特出して、之に至上の地位を與へることの中には、命令強制を讚美する心理が潜んでゐる。吾々も今日の國際關係に於て絶對に武力を使用してはならないと云ひ切る自信はない、又

國內に於て人々の意志に反して命令強制する必要があることも認める。然しながら武力と権力とは必要ではあらうとも、而も尙依然として止むをえざる××たることに變りはない。然るに止むをえずして必要を認めることから一步を進めて、武力と権力とを禮讓するに至つては、本末を顛倒するものである。威壓と強制とは必要ではあらう、然しそれを必要ならしめることは、吾々の恥辱でなければならぬ。此のことを忘れて暴力を當然の事として看過し、やがて人は威壓と強制とによつて動くものと解釋し、彈壓政治と獨裁政治とに傾くのは、國家主義より來る嘆すべき害悪である。

國家主義の弊害の第四は、それが物質主義だと云ふことである。こゝに物質主義とは、人格の爲に必要な物件を目的として、之に最高の價値を與へる思想を云ふのであるが、吾々の目的は唯人格にのみある、あらゆる物件は之が爲の手段に過ぎないものである。人格こそすべてのものを價値付けるものであるのに、價値付けられるものを移して、價値付けるものとする、之が物質主義である。國家は個人の集團たる社會である。人間の集團たることに於て他の物件とは異なるものではあるが、尙社會は依然として物件であつて、人格の主體ではない。國家が人格

成長に必要な物件たることには、吾々も勿論異議はない、然し必要であることは、之を必要ならしめるもの、即ち人格を前提としてゐる。物件たる國家を至上絶對のものとする國家主義は、凡そ最も神聖にして尊嚴なる人格の存在を看過することに於て、同じく物件たる財産や貨幣を至上絶對のものとするとは異なる所がない。彼の利己的個人主義は、國家主義と對立するかの如くであるが、利益を以て至上のものとする物質主義たることに於て、國家主義とは靈犀相通するものがあるのである。國家主義は物質主義であるから、國家主義者が國家を考へる時に、國家の中の個人の魂の成長は視野から逸せられて、領土の擴張や貿易の増加や軍隊の人数や軍艦の噸數のみが、前景に浮び出て來る。國家主義者にして學問や藝術や宗教や之等の文化に着目するならば、その人は既に國家主義ならざる思想を混入してゐるのである。物質主義が資本主義により育成されて、いかに多くの害毒を流しつゝあるかは、世人は既に充分に知り抜いてゐる。物質主義の弊害を嘆ずるものに國家主義者が多いが、而も國家主義自體が一種の物質主義たることを知らざるものが多いのは遺憾である。

國家主義の最後の弊害は、彈壓獨裁政治に傾き易いことである。國家主義に於ても人間各自

を無視するのではない。國家を構成する成分として、個人は國家の貴重な要素である。然し國家主義にとつて個人とは、第一義的の國家から反射的に、考慮の對象となるに過ぎないのである。従つて國家に必要な限りに於て個人は計算されるが、個人への關心は常に國家の爲か否かによつて制約される。のみならず國家主義が物質主義たる結果として、人間の至重なる靈魂の成長は遠く背景に押し退けられてゐる。かくて國家主義者からは、科學や藝術や宗教や教育の眞正の價値は輕視され、又苦しみ悩む民衆の成長の爲にする社會政策は厄介な問題とこそ映ずれ、爲さねばならぬ意義あるものとは考へられない。彼の言論の自由とか政治上の自由とかは、民衆の人間としての成長と云ふ所に、最深の根據を求めねば主張しえないのである。然るに國家主義者は此の根據には無縁の衆生であるから、彼等は之等の自由を尊重することを知らない。唯國內の思想統一を機械的に企てることのみを知つて言論を壓迫し、能率を發揮することのみを知つて、多衆代表制度を無視して官僚政治や獨裁政治を謳歌し易い。殊に國家主義が外國との對抗を重要視する點からも、國內の和平統一と處置の敏活とを急いで、壓迫獨裁に傾き易い。かくて見來れば、國家主義を採るか否かによつて、吾々の社會生活は全面的に異なる姿

を現出するだらう。國家主義を採らざりせば、現代のより重要な問題がより鮮かに前景に現はれて來るだらう、然るに國家主義は人の眼を掩うて之から注意を逸せしめる。誠に國家主義こそは、吾々の視界を曇らすものでなければならぬ。

(八) 國家主義に代はるべきもの

私は國家主義の不備とその弊害とを指摘した。要するに國家は至上絶對の地位を與へらるべきものではなく、國家主義は吾々の批判の基礎たるべき價値原理ではありえない。さればとて國家が輕視され無視さるべきものだと言ふのではない、國家の爲と云ふことは、消極的牽制的な役割を演ずるには必要である、唯それは唯一絶對の原理として價値の王座に位すべきものではない、傍系的從屬的な原理としての地位を與へられれば足るのである。

それでも人は尙國家主義に一抹の執着魅力を感じるかも知れない。それは國家の命令強制の權力が必要缺くべからざるものだと言ふことと、國民と云ふ社會が他の國民と對立して、吾々の生活基礎として必要だと云ふことを腦裡に描いてゐるからであらう。だが私も前に述べたや

うに、國家存在の理由を否定するのではない、唯それだからとて國家に至上の地位を與へることにはならないと云ふだけである。國家主義を排除すればとて、之に代るべき價值原理を以てして、國家に至當の地位を與へうるならば、人は國家主義に執着する必要はなからう。又國家主義の魅力は、全體を高唱することによつて、飽くなき個人の慾望と止む所なき×××××とを抑制することが出來ると云ふ點にあるかも知れない。確かに利己的個人主義と階級至上主義とに對立して、之等を牽制するものは望ましい、だが國家主義がたとへ之等と對立するものとしても、それだけで國家主義を是認する根據にはなりえない。他に之に代つて國家主義と等しく、利己的個人主義と階級至上主義とに對立し牽制するものがあるならば、その人は國家主義を清算して満足すべきである。

然らば國家主義に代るべき價值原理は何か。それは理想主義的個人主義である。至上絶對の價值あるものは、人格であり唯人格のみである。それこそがあらゆるものを價值付けるものであり、人格の成長としてどれだけ役立つかによつて、あらゆるものは價值付けられる。而して人格の主體は唯個人のみであつて、個人以外の何物でもない、個人の集團たる社會は固より人

格の主體ではない。これが吾々が個人主義を採る所以である。然し人は又彼の個人主義かと嘆息するかも知れない。然しその時その人は個人主義に二種あつて、一は利己的個人主義であり、他は理想主義的個人主義であると云ふ區別を忘却してゐるのである。利己的個人主義は既にその弊を極めた、だが理想主義的個人主義は之とは全く異なるものであり、利己的個人主義に對立して、之を克服すべく生誕したものに外ならない。

人格の成長は各個人の獨自の任務である、だが成長に必要な條件にして具備せざる限り、人格も亦枯死するの危険がある、こゝに於て吾々は人格成長の條件として、精神的物質的の條件を必要とする。教育宗教科學藝術等はその精神的條件であり、命令強制の權力や經濟や本文第二項に擧げた各種の社會は、その物質的條件である。吾々が國家の命令強制の權力を是認するは、それが人格成長に必要な條件だからであり、又吾々が國家と云ふ社會を外國に對立して防衛せんとするは、國民と云ふ共同社會が、吾々の人格成長に必須の條件だからである。吾々は人格をその最深の部分まで窮める時に、單に自己のみを關心することなく、自己の同胞への關心をそこに見出すであらう。人は自己が生きんが爲に同胞を犠牲とすることを羞恥し後悔

し懺悔する。若し甘んじて他を犠牲とするものがあるならば、それは人の生れながらの罪惡に非ずして、かくせずんば止むをえざる社會制度の缺陷に基づくのである。かくて人格の成長は當然にその内容として同胞への關心を育成する。同胞を無視して自己の成長がありえず、成長ある所に同胞への關心が高められ深められる。自己の人格の成長と同胞の人格の成長への希求とは、二にして一なるものである。こゝに於て理想主義的個人主義から到達する社會批判の基準は、あらゆる社會成員の人格の成長と云ふことであり、之によつて人は社會制度を批判しうるだらう。あらゆる成員と云ふ概念の中には、自己と同胞とが共に包含される。かくて理想主義的個人主義は徒に自己を犠牲とすることを要求する精神主義に對立する、何故なれば自己の人格の成長に努力することは、「自己の」なるが故にとて輕視さるべきではない、「人格の成長」の名に於て、吾々は尊重の權利があるからである。吾々が苦しみ悩む民衆の社會運動を是認するは、此の立場に於てである。又理想主義的個人主義は、自己のみを關心事とせざること、に於て、利己的個人主義に對立する。自己に關心すると共に、之が爲に同胞を犠牲とすることを許さない、何故なればあらゆる成員は、自己と共に吾々の關心の對象だからである。自己を

主張すると共に、排他獨占到陥らないこと、之が吾々の限界でなければならぬ、吾々が資本主義の根本的改革を要求するは、此の立場に於てである。

理想主義的個人主義は、國家主義の如くに、明白にも暗黙にも、他の原理を借用する必要を認めない、それあるを以て足る一元的の原理である。又それは國家主義の如くに、保守主義にも武力崇拜にも彈壓主義にも物質主義にも陥る危険性のないのみか、吾々の道徳的批判の源泉は、此の原理よりして滾々として湧き出づるであらう。

(九) 結 論

今や非常時日本は、資本主義下に於ける利己的個人主義と、資本主義に反對するマルキシズムの階級至上主義とに對立して、國家主義の名に於て打開を試みようとしてゐる。だが國家主義は既に數十年間日本を指導して來た原理であつて、今更に新しきものではない。その名に於て新日本が更生しないのみならず、過去の日本を誤てるものが、寧ろ國家主義ではなかつたか。新日本の爲すべきことは、國家主義を古き囊中より呼び起すことではない。翹つて國家を

至上絶對とする價值原理を再検討することである。社會的不安も政治的不安も國際的不安も、すべての解決は、先づこゝに立出を開始すべきである。傳へられる昭和維新とは、吾等の價值の維新を意味するものでなければならぬ。

殊に吾々の注意すべきは、國家主義者が往々にして愛國の名を獨占して、自己と異なる思想を目して國賊視することである。言語と歴史と慣習と感情とを共同にする同胞國民を、誰か關心の對象とせざるものがあらう。輝かしい特殊の文化を育成した此の國家を、誰が愛護せざるものがあらう。だが國家を愛することと、國家主義を信奉することとは同一ではない。英國々旗が世界の隅々に翻ることよりも、英國の貧しき人々の負擔が、六片より輕からんことを望むと云つたグリーンン言葉も亦、等しく國家を愛する至情の發露ではないか。

愛國と云ふ名に於て、いかに多くの罪惡が此の世に爲されたることよ。現代の重大な問題は、國家を愛するか愛せざるかの對立ではない。國家を愛することとは何であるかを究めることとでなければならぬ。

昭和九年十月號「改造」

(六) 國際的不安の克服

(一) 世界に漲る戦争氣運

特に鋭敏な感能を持たないものでも、今日の世界に戦雲の深く立ち罩めてゐることに氣付くであらう。一九三二年ムソリニーは云つた、「ファシズムは平和主義の學説を排撃する、それは闘争を抛棄することから、又犠牲に對する卑怯の行爲から生れるものである。唯戦争のみが、一切の人間の精力を最高の緊張にまで引き上げ、それに突進する勇氣ある人民に、高貴の印象を刻する。……かくして平和と稱する此の有害なる學説の上に築かれた學説は、ファシズムに敵對するものである」と。又ヒットラーはその著「余が闘争」の中で云ふ、「戦争の意圖を目的に包含せざる同盟は、價值なきナンセンスである」と。更にバーベンは、「一九三三年一月三十日に於て、獨逸は平和主義と云ふ言葉を、その單語より撤去したと云ふことを、世界に

向つて知らしめねばならない」と云ふ。傲然として之等の言葉が發せられる最近數年を、かの大戰直後の平和主義旺盛の時代と比較する時に、人は隔世の感に打たれざるをえまい。戰爭直後には戰爭の生々しい慘禍と戦後の整理への忙殺とが、世界を擧げて平和主義を謳歌せしめ、國際聯盟は國際平和實現の樞軸として仰望された。然し一九二三年乃至一九二五年を一轉機として平和主義は徐々として退潮して、之に代はつて軍國主義が擡頭し、遂に一九二九年の米國恐慌以來その形勢は更に拍車を加へられた。今日の世界が戰爭の危機に臨みつゝあることは、一九一四年以上だとさへ云はれて、世界各國は刻々として危険なる戰爭への道程に車を驅りつつある。

吾々の身邊に解決を迫つてゐる問題は多々あらう、だが戰爭に關するものほど重大でそして複雑なものは尠い。他の問題はいかに解決されようとも、ひと度戰爭の危険が迫る時に、それらの解決は跡方もなく役に立たなくなる。否戰爭の脅威がある時に、解決さるべき一切の問題が看過されて了ふほど、國民の眼は唯戰爭にだけ注がれる。これ戰爭に關する問題が重大だと云ふ所以である。又國內の問題はいかに複雑であらうとも、言語と慣習と感情とを等しくする

國民の内部であるだけに、それを解決するに一應の見通しを付けることが出来ないではない。だが國際間の問題となる時に、すべての前提を異にする數箇國が、互に原因となり結果となつて紛糾した事態を形成してゐるので、何れを原因だと指摘することが困難であり、若し他國の蒙を啓かうとしても、言語と思考とを異にする他國民は、殆ど自然現象に訴へるが如きもどかしさを感じしめるだらう、これ此の問題を複雑な問題だと云ふ所以である。のみならず、戰爭と云ふ問題の前に立つ時に、吾々は自らの心の中にさへ、異様な對立を意識しないであらうか。冷靜な書齋の裡に理性の聲に聴く時に、それは戰爭に對して一つの態度を指示するであらう。だが街頭に出て軍事物語を聞く時に戰爭映畫を見る時に、凡そ前とは異なる思ひに胸の躍るのを禁じえまい。本能かと思はれるほどに、祖國の爲の戰爭は、吾々の魂を慄はす力を持つてゐる。いかなる問題に就ても屢々力を現はす彼の理性と本能との葛藤は、此の問題に就て擴大されて現はれて來るではないか。その故に戰爭に對する冷靜なる検討は、更に一層困難である。

吾々は世の所謂平和主義に與してはならない。何故なれば、安價な感傷を以て平和が獲得さ

